



1. 家で電気が使えない

20XX年のある秋の話だ。

一週間ほど前に突然世界中の石油が使えなくなったんだ。今ある石油は利用できるそうなんだけど、新しく石油を買うことができないというんだ。

なんでも政府の発表によれば、2週間ほど利用できないということだった。よくわからないけど石油が使えなくなると、電気が使えなくなるそう。そして電気がつかえなくなると、テレビゲームができなくなる！

最初の3日の間は夜間の5時間だけ電気が利用できるという話しだったんだけど、みんながあせって同時に使い出したためなのか、電力施設がパンクしてしまい、今ではほとんど使えない状態になっている。

立花早志（そうし）は本郷山小学校の5年生。でも学校はこの騒ぎでお休みになったから、今は家でゴロゴロしているだけだ。

普段でも朝はいつもギリギリまで寝ていた早志はさらにお寝坊さんだ。

「おかあさん、お昼ごはんは何？」

まだ眠たそうな早志は居間の床に寝転がってマンガ雑誌を読んでいる。母親の音子（おとこ）の顔も見ずにそう尋ねた。

「何がいの？ 冷蔵庫もまともに使えないから買い置きができないし、またスーパーに行かないと」

こんな生活にそろそろうんざりしている音子も、早志の方を見ることもなく、ソファーに座ったままで即座に答えた。

電気が使えないのでご飯も炊けないからホカ弁屋さんでご飯でも買ってくるしかない。まあ料理はガスコンロが使えるので材料さえあればなんとかなる。

しかしスーパーもコンビニも電気がないとほとんど頼りにならない。スーパーにある冷蔵・冷凍装置も家よりはましだけどかなり制限されているので、肉や魚以外の必需品ではないアイスクリームなんてものは置いていない。ジュース類は生温い缶ジュースしかない。料理用の食材も限られている。野菜やくだもの中心だ。

レジもしょっちゅう止まって使えないから、みんな一個一個電卓で計算しているので時間がかかってしょうがない。いつも暗算でやっている八百屋さんの方がやり取りもテキパキしている。

当然深夜営業なんてありえない。暗くなるとだいたい閉店だ。ど田舎にあるおばあちゃん家みたいに7時頃には辺りが真っ暗になる。

「今日は麻婆豆腐がいい！」

「だめよ、豆腐がないもの。昨日からお店に置かなくなったのよ」

「えー。じゃ、カレー！ お母さん特製のやつ」

「レトルトじゃだめなの？ 特製カレーは牛肉抜きよ。シーチキンでいいわね。肉は高いんだから」

「牛じゃないの？ うーん……まあ……しょうがないね……」

早志は口を尖らせて肯いた。

いつものスーパーに着いた。照明がないので店内はとても暗い。しかしいつもと違うのはもう店の中が大混雑になっていることだ。

1. 家で電気が使えない 続き

「昨日よりもすごいことになっているわねえ」

音子が少し不安そうな顔になる。

「なんで急にみんなあわてているのかな？」

音子は早志の問いに応えることなく走り出した。早志もあわてて付いていく。

店の中を見回すと売り切れの垂れ幕があちらこちらに貼ってあった。

「みんな買い占めに来てるんじゃないの？」

「わからないけど1週間分の買いだめが皆一斉に切れたんじゃないかしらねえ？」

なんか緊張感のない音子の回答に早志はちょっといらいらしながら、

「それで今日のご飯は何になるの？」

しかし相変わらずマイペースの音子は割り切った顔で即座に、

「そうねえ。今日はやっぱりレトルトカレーで我慢しましょう」

「じゃ、急いでホカ弁屋に行ってご飯買わないと」

早志は自分以上にのんびり屋の音子を急かせた。

しかし……

ホカ弁屋も昨日で既に閉店になっていた。

「あちゃあ！ おかあさん、どうするの？」

早志はちょっと恨めしそうに音子を見た。

「非常用のレトルトのご飯があるから大丈夫よ」

音子も開き直っているみたいだ。

「お母さんちょっとのんびりし過ぎだよ、まったく。もっと早く家を出るべきだったんだ！」

「しょうがないじゃない。停電は2週間だけという話でしょう。あと1週間の辛抱じゃない、文句言わないの」

音子のはのんびり屋のくせに我が強くて頑固だから絶対謝ろうとはしない。早志も父親の武志もいつも追求はそこで終わってしまう。困ったものだ。

ちなみに父親の武志は日本で最大の電力会社である関東電力のエンジニアをしている。当然この騒ぎで1週間前から会社に泊まり込んで対策を練っている。

「お父さんはいつ帰るの？」

音子を攻めるのを諦めて、早志は話題を変えた。

「そうねえ。とにかくこんな大事件はお父さんが会社に入ってから初めてのことだから。お母さんも検討がつかないわよ」

つながりにくくなったので電話もネットもまともに使えず、武志も忙しくて時間がないらしく連絡もない。状況はまったくわからないのである。

「お父さんは何を食べてるんだろう？」

早志はおいしそうなカレーを食べている武志の顔を思い浮かべた。

「お父さんも同じよ、たいしたものは食べられないに決まってるでしょう！ もう食い意地が張ってるんだからね」

早志はカップ麺をわびしく食べている武志の様子を思い浮かべて我慢することにした。

2. 地球のエネルギー

ちょっと難しい話しをしよう。早志の住む未来（といってもそんな先の話でもない）では、地球の地下深くにある石油の量（埋蔵量という）は、今後500年分以上利用できるだろうと言われているんだ。

というのも10年ほど前に新しい油田がいくつも発見されたんだ。しかも埋蔵量がこれまでの油田を全部合わせたものよりも数10倍もあることがわかったんだ。

昔（20世紀の後半位のことだけど）は、石油は数10年後になくなってしまおうといわれていたんだ。石油危機といわれたりして石油の価格が急騰したりした。そのために代替のエネルギー（代替エネルギーと呼んでいる）を人類は常に探し求めてきた。しかし調べてみると実際には地球内部には予想以上の石油が残っていることがわかったんだ。だから石油危機の意識は今ではほとんど薄れてしまっている。

埋蔵量とは別に、もう一つ石油には大きな問題があった。

環境問題だった。

石油を燃やすと二酸化炭素（CO₂）が出る。それが大気を覆ってしまうことで地球の熱が大気の外に逃げることができなくなり、地球の平均気温が上昇してしまうということだ。これは地球温暖化と言われ、自然に悪い影響を与えるとされた。そのため石油は目の敵にもされたりしていたんだ。

しかしこれも風向きが変わる出来事が起きた。それは10年ほど前から、世界各地の気象学者たちが、突然地球は寒冷化しつつある、つまり氷河時代に入りつつあると言い始めたことだ。

つまり二酸化炭素による温暖化は地球がこの氷河時代になるのを遅らせる効果があるのではないかと、むしろ好意的に受け取られるようになってきたんだ。もちろんこの説も本当かどうかはいまだにはっきりしてはいないんだけど……。

とにかく当面の間、石油がなくなってしまうという心配がなくなり、その価格も更に安くなり、かつ寒冷化を防ぐという効果も期待され、人類は堂々と安心して石油を使い続けていくようになっていたんだ。

これは石油と同じで二酸化炭素をたくさん排出する石炭や天然ガス（化石燃料と呼ばれている）なども同様に地球温暖化を気にすることなく人々は思う存分に使い始めている。

もちろん今でも代替エネルギーがまったく使われていないというわけではない。より便利なエネルギー源を人類はいつも探している。

でも、例えば、原子力エネルギー。

代替エネルギーとして昔は人気が高かったんだけど、今ではほとんど使われていない。

というのも原子力発電で利用されるウランはその使い残りを再利用することで原子力爆弾にも転用できるんだ。

だから核兵器がなくなることを求めている過激なテロリストたちが原子力発電所の建設を妨害する行動を取っているんだよ。

具体的には10年ほど前に世界各地の原子力発電所が相次いでテロ攻撃を受けたんだ。そのために地球上の原子力発電所は現在停止状態となっているし、新しく建設しようとする計画もすべてストップしてしまったんだ。

そのため今は、その他の代替エネルギーとしては自然エネルギーと呼ばれる太陽光や太陽熱発電に期待がかかっているんだけど、それでもまだ地球のエネルギーの90%以上は石油などの化石燃料から作られているのが現実なんだ。

3. お父さんの会社

早志の父親、立花武志が勤める関東電力は、今や世界でも有数の電力会社といっても良い。

世界各地の発電所でも関東電力の技術が生かされている。特に太陽光発電システムの技術においては圧倒的な力を持っていて、世界中の電力会社が関東電力の技術を採用している。

もっとも太陽光発電のような代替エネルギーの人気は急激に落ちていて、地球上で利用する動きはほんのわずかしかない。

むしろ地球外での活用に注目が集まっているんだ。とくにアメリカや日本を中心にして十年前から始まっている火星移住計画の中では太陽光発電がエネルギー源の中心と考えられているんだ。なぜなら火星には石油資源がほとんどないと考えられているからだ。そして火星の太陽光発電システムにも関東電力の技術が採用されているんだ。

関東電力のシステムは、巨大な受光用パネル装置を火星の軌道上に置き、そこに太陽光を吸収させているんだ。もう少し詳しくいうとその受光用パネルで得た光エネルギーを火星内の発電所に向けてマイクロ波に変換して送り出すんだ。既に稼働していて、数万人の移住者の生活を支えているんだ。もちろんこの仕組みはいつでも地球上で利用することができる。必要ならばの話だけど・・・。

お父さんはすごいエンジニアなんだ！ というのが早志の自慢だ。

4. お父さんの話

会社に泊まり込んでから10日目。ようやく父親の武志が帰ってきた。帰ってきたというよりもちょっと戻ったという感じだった。

「お父さん、お帰り！」

早志はうれしくて武志に抱きついた。もう5年生だというのに早志はまだ甘えん坊だ。

「早志、元気になってたか？ 不便で大変だったな」

そういつて武志は早志の頭をくしゃくしゃに撫でる。

「もうお腹ペコペコだよ。スーパーにももう食べ物がほとんどないんだから！ ねえお父さん、これからどうなるの？」

早志は訴えるような目で武志を見つめる。

スーパーもコンビニも既に昨日から営業停止になっていた。今は非常食ばかりを食べている。

「ほら早志、お父さんは疲れているんだからね。あなた、お風呂にでも入って少し体を休めないと。ガスも水道もまだ大丈夫だから使って！」

音子はそういつて武志の上着を受け取った。

「いや、先に状況を話しておいた方がいい。皆そこに座って」

武志はちょっと緊張した面もちで、二人の顔を交互に見ながらダイニングのテーブルに腰をかけた。音子と早志も急いで武志と向き合うように二人並んで腰をかけた。音子は手に持っていたお茶を武志にテーブル越しに手渡した。

「これから話すことは極秘事項だから誰にも話をしたらだめだ。いいね？」

武志はそういつて二人の目をそれぞれじっと見た。二人はゆっくり肯いた。

「政府から近く発表があるんだけど、今回の石油利用停止の件は思った以上に大変なことになっている」

たまらず早志が口を挟む。

「大変ってどうなっているの？」

「うん。今回は2週間の利用停止という話だったんだけどおそらく当面は、いや永久に利用できない可能性がでてきた」

「えー！ じゃこんな生活が永遠に続くの？」

音子が絶望的な顔をして叫んだ。いくらのおんぶり屋でもさすがに今回の騒ぎは疲れ果てたようだ。

「スーパーやコンビニにはもう行けないの？ もうおいしいご飯は食べられないの？」

早志の一番の心配事はやはり食べ物である。ふたりの強烈な拒否反応に武志は少しあわてた。そして、自らを落ち着けるように武志は熱いお茶を口にしたのだが、あちっ、と言って飲まずにテーブルに置いた。猫舌なのだ。早志もそうである。威厳を取り戻すために咳払いを一つして武志が話を続ける。

「早志は知らないだろうが、十年前までは地球には温暖化問題というものがあったんだ」

「温暖化？」

「そう。僕らは、電気を生み出したりするために、石油、石炭そして天然ガスなどを燃料にしているんだけど、その時に二酸化炭素が一杯排出されるんだ。そしてその二酸化炭素が大気を覆うと地球の熱が外に出ていかなくなってしまうんだ。畑で野菜を作る時の温室みたいになってしまうんだ。温室効果ともいうんだ。

その結果、地球の気温が上がってしまう。すると南極の氷などが融けてしまって陸地の一部が沈

んだり、また寒い所でしか生きられない動物や植物が死んでしまったりすることになるんだ」
「それは大変なことだね！」

「そうなんだ。それで僕ら人類は世界中で力を合わせてこの二酸化炭素を減らすことにしたんだよ。その頃お父さんはクリーンエネルギーを開発するチームにいて、より効率の良い太陽光発電システムを研究していたんだ。これが二酸化炭素を減らせる最強の仕組みだって思ってた」

「それが今火星で動いているんだよね」

早志はうれしそうに話した。でも武志は笑わなかった。話を続ける。

「でも、十年前に方針が変わったんだ」

「どうして？」

「世界中の気象情報を分析した結果、地球自体は温暖化していないことがわかったんだ。むしろ今後百年間に渡って寒冷化、つまり氷河時代に向かう可能性がかなり高いということも指摘されたんだ」

「つまりあのマンモスも死んでしまった寒い時代に逆戻りするってこと？」

早志は最近読んだ古代動物に関する本を思い出していた。

「そうだ。そしてもっと驚いたことに、分析によると二酸化炭素こそがこの寒冷化を遅らせているという調査結果も報告されているようなんだ」

「じゃ、地球を救おうとしていたの？」

早志が先回りをして聞いた。

「結果としてはそういうことになるね。だから方針が変更されたんだ。つまり二酸化炭素をもっと排出する方向に舵を切ることになったんだ。早志は知らないだろうが、うまい具合にちょうどその頃に新しい石油の油田が発見されたんだ」

「油田？」

「そう石油が地中にいっぱい貯まっている場所のことだ。だからそれまでの古い油田の石油をすべて使ってしまったてもこの新しい油田を利用すれば大丈夫だとみんなが思ったんだ」

「だから、お父さんの太陽光発電システムは地球ではあまり使われていなくて火星で使われているんだね？」

「そのとおりなんだ」

「じゃ、なぜ急に利用中止命令が出たの？」

早志が先回りをするように聞いた。

「そうなんだ。いよいよあと数年で古くからある油田からは石油がとれなくなる。それで新しい油田をこれから本格的に利用することになったんだけど、よく調査してみるとその石油はこれまでの石油とは違って人体に非常に有毒な成分を含んでいることがわかったんだ」

4. お父さんの話 続き

「つまり毒が入っていたの？」

「そういうことだ。なぜあの地域の石油だけ毒を含んでいるのかわからないんだが、今の技術ではその毒の成分を除くことができないんだ。この石油を燃やすと大気中に毒をばらまいてしまうことになり、人類が滅亡する可能性もあるんだよ」

「じゃ、今使っている油田の石油でおしまいってこと？」

音子がようやく理解したように質問した。

「今の石油だけだとあと数年でなくなる」

「じゃ数年の間は今まで通りでいいんじゃないの？」

早志は少しの希望を抱いて質問した。おいしいご飯が食べられるかもしれない。

「そうもいかないさ。これからは石油は貴重品ということでとんでもない価格になる。それに油田のある国は自分の国で使いたいというから他の国にはわけてくれなくなる。だから今日本に残っている石油だけでおしまいになる可能性があるんだ。それもわずか100日分しかないんだ」

「100日って、ええと、3ヶ月ちよっとってこと？」

早志はそれでも100日間だけでもおいしいご飯が食べたいと思った。

「そういうことになるね」

武志は少し冷えたお茶をようやくすすった。

「油田のある国は分けるつもりはないの？」

早志は質問を続ける。

「うん。実は今回2週間の利用停止期間を設けたのも、油田国が輸出禁止を突然発表しようとしたからだ。なんとか世界各国でお願いして2週間の猶予期間をもらったんだ。突然の発表では世界中が大パニックになるし、こちら側としても事態の受け入れの準備が必要だからね。それにこの2週間の利用停止による影響から対応策などがある程度わかってくるからね。いずれにしろ彼らはもう石油をわけてはくれないと思う」

武志は早志の小さな手を包むように手を重ねた。

「それでお父さんの会社がなんとかしてくれるんでしょう！」

早志は期待を込めて言った。

お父さんはすごい人だからきっと解決してくれると。

「もちろんなんとかしたいと思っているよ。だから10日間も会社に泊まり込んでいたんだよ、カップ麺ばかりを食べながらね」

音子と早志はやっぱりという顔で目を合わせた。

「それでどうするの？」

音子が少し落ち着いて質問した。

「おそらく当面は電力制限が続くと思う。スーパーやコンビニなどのお店や公共施設への電力供給が優先されるはずだ。家庭の電気は使えないかもしれない。幸いガスや水道はなんとか大丈夫だから夜の暗闇を我慢すれば生きていける」

武志は少しぬるくなったお茶を一気に飲み干してから話を続ける。

「その間にうちの会社としては、今休止している原子力発電所の再稼働も考えているし、また石油の代わりに天然ガスを利用した火力発電も検討している。もちろん得意の太陽光発電もフル稼働させる。でも……」

「でも、どうしたの？」

早志は不安気に聞く。

「原子力発電はまたテロから攻撃を受ける可能性があるから、政府が本当に稼働を許可するのはまだわからないんだ。毎年日本政府にはテロ組織から絶対に使うなという警告が届いているそう。それから石油の代わりに天然ガスを利用するにしても石油同様に各国の取り合いになる可能性もあるし、産出国が輸出制限に乗り出すと思う。だから日本国内の天然ガスを使うしかないが思ったほどの量は期待できない。また太陽光発電は各家庭への屋根用受光パネルの設置を進めるしかないんだけど、これから発注が殺到するから時間はかかるだろうなあ。うちはマンションだから設置には特に時間がかかるはずだよ」

武志は申し訳なさそうに顔を下に向けた。

「新しい油田が10年前に見つからなければ、太陽光発電がもっと普及していたのにね」

音子が恨みがましくいった。武志が再び顔を上げる。

「この10年間、石油は地球の救世主だったんだからしょうがないよ。とにかくがんばって乗り切るしかない。お父さんもがんばるから早志も頑張れるか？」

うん、って顔で早志は頷いた。もちろんおいしいご飯がしばらく食べられないので悲しかった。

5. とにかく学校へ

父親の武志はその日の夕方にもた会社に戻って行った。省エネだということで家にあった自転車をこいで出勤した。久しぶりの自転車にちょっとよろける。

早志は、武志の後ろ姿が消えるまでベランダから見送っていた。横で干した布団を取り込んで音子に言った。

「自転車に乗ったヒーローだね」

「そうよ。ヒーローはね、最初は頼りなくみえるもんよ……でも、最後は凄い！」

音子はハタキを空に突き上げて笑ってそう応えた。

「そうだ。お父さんは凄い！」

早志は両方の手の指を交互にしっかりと絡ませてから、2本の人差し指だけをアンテナのようにずっと前に伸ばすと武志がさっきまで見えていた道の方角に向かって、念ずるようにエイッと小さな声を出した。TVの戦隊ヒーローが、敵にやられて弱っている仲間を復活させるために、スーパーエネルギーを注入する時のポーズだった。

「お母さん、ちょっと学校に行ってくるよ」

次の日の朝、早志は朝食を食べ終えた後で音子にそう告げた。

「行って何するの？」

「特に予定はないけど、誰か友達がいるかも知れないし」

「いいけど、お父さんの話は誰にもしちゃだめよ、わかってるわよね？」

「当たり前だろう！ お父さんとの約束なんだから！」

早志は音子にちょっと疑われたのが悔しかった。ヒーローにはなれそうにないけど、お父さんとの約束を守る正義の心だけは持っているという自信があった。

「もちろん信用してるわよ。じゃ気をつけて行ってらっしゃい。お昼には戻るのよ。おいしい非常食を作って待ってるからね」

音子は冗談めかしてそういった。

ちょっとふくれっつらの早志は何も応えずに黄色の帽子を目深にかぶってそのまま外に出た。

本郷山小学校は、早志のマンションから歩いて5分ほどの場所にある。この辺り全体がゆるやかな丘陵地となっていて、学校はその一番頂の所に建っている。校舎は3階建てでその3階にある早志のクラスからは晴れた日には遠くに富士山が見える。きれいにすそ野まで見える絶景だ。

早志は正門の前に立った。休校のためにしっかりと施錠されているので入ることはできない。早志は裏に回って、自分の背丈程度の堀をよじ登って校舎の裏庭に飛び降りた。

早志は校舎を見上げた。早志のクラスである5年1組の窓が見える。しかも窓が開いていて、中から話し声が聞こえる。

（誰かいるんだ？）

早志はげた箱のある玄関口に走ると、そこで上履きを履き階段を駆け上がった。そこには同じクラスの奥田猛と永松清がいた。

「早志！」

猛がうれしそうな声を上げた。清も、ようっと右手を上げる。

「二人で何してるの？」

早志は二人の前に近寄りながらそう尋ねた。

「なんとなく暇でそれで学校に来てみたら同じように清も来てたんだ」

猛が清の方をこづきながらそう答えた。

「そうか皆同じことを考えてたんだあ！」

早志はにっこり笑った。

「僕も仲間に入れてもらってもいいかなあ？」

後ろを振り向くと、1組の木村浩一郎が立っていた。

「浩ちゃん！」

浩一郎は早志の幼稚園からの幼なじみだ。二人の父親同士も幼なじみで、早志が小さい頃はよく両方の家族でいろんな所に行った。

頭が抜群に良くて、常に学年トップだ。いつも一人で考え事をしているみたいで、人付き合いが苦手なのか、友達はほとんどいない。早志もなんとなく近寄り難い雰囲気の浩一郎とは小学生になってからはクラスも違うこともあって、挨拶を交わす程度であまり付き合わなくなっていた。

浩一郎の家はこの辺りの大地主だ。本郷山小学校も元々は木村家の土地だったものを浩一郎の曾祖父が寄贈したものだった。浩一郎の父、木村浩大は奇想天外なアイデアを持つ著名な発明家で海外の大学で学んだ後は、自宅に研究所を建設し、そこで今は新エネルギーの研究をしている。あまりに奇想天外なアイデアなのでちょっと変な博士と世間では思われている。父親の研究が認めてもらえない浩一郎はそれが面白くないらしい。だからまわりのみんなが敵に思えて仕方がないのかも知れない。彼が心を閉ざしているのはそんなことが影響しているのかも知れなかった。

5. とにかく学校へ 続き

武志もエネルギー関連のエンジニアなのでたまに博士と電話やメールで情報交換をしているらしい。

猛たちは浩一郎とはほとんどはじめて口を利くようなものなので少し緊張していた。

「き、木村君はいつからいたんだ！」

清が尋ねた。

「隣の教室でちょっと前からいたよ。でも、君たちのことは知らないし・・・でも早君の声がしたからのぞいてみたんだ」

そういつて浩一郎は早志に目を向けた。

そして続けて、

「早君、お父さんから何か聞いてるかい？」

浩一郎が短刀直入に聞いてきた。

「えっ……」

早志はすぐあの件だと思った。

でも、誰にも話しちゃいけないという武志の言葉を早志は思い出していた。

「な、何も……」

早志は浩一郎の視線を避けながらぶっきらぼうに答えた。

「変だなあ。関東電力一番の技術者のおじさんがこの事件を知らないはずがないと思うんだけど。うちのお父さんは海外の科学者仲間から教えてもらったそうだよ」

「浩ちゃん、その話はダメだよ」

思わず早志は口走ってしまう。

「なんだ、やっぱり知ってるんじゃないか！」

浩一郎はそういうと口元を少しだけゆるめて笑った。

「な、なんのことだよ、早志」

猛が早志の肩をつかむ。

「うん……」

「早君、話しちゃいなよ。いずれ明日にでも政府から発表があるはずだから」

そういつて浩一郎は早志に目で促した。

お父さん、ごめんなさい……。

明日わかるのならしょうがないかと諦めた早志は仕方なく武志から聞いたことを話した。猛も清も早志が最初そうだったように半信半疑で聞いていたが、浩一郎の相づちでそれが本当らしいと信じだし、そして最後は納得した。

「いいか、このことは政府が発表するまでは内緒だからな」

早志はちょっと怖い顔をして猛と清に告げた。お父さんとの約束をこれ以上破るわけにはいかなかった。

「僕ら4人の秘密だ！」

浩一郎が右手を体の前へ伸ばした。猛と清の手が重なる。みんなとつるんだりするのが嫌いな浩一郎がこんなことをする姿を、早志は不思議に思いながらも最後に手を重ねた。

「それでこれからどうなるんだい？」

清が少し不安そうに尋ねた。

「学校はしばらく休みだろう？」

猛がうれしそうに話す。

「学校は昼間だから問題なく再開されるよ」

浩一郎が冷静に応える。ちえっ、と猛。

「公共機関の停電は最低限にとどめることになるけど、家庭の電気の利用制限が続くな。1日2時間とかね」

早志が補足する。

「宿題廃止だな。夜は勉強できない」

猛が便乗しようとする。ちゃっかり者だ。

「宿題は夕方やるものだからなくなるらないよ」

と浩一郎。また、舌打ちする猛。

「とにかく、うちのお父さんたちががんばって解決してくれるさ。子供はそれを信じて待つしかないよ」

早志は武志を誇りに思いながらきっぱりとそう言った。

「僕ら子供だってできることがあるよ」

浩一郎はそういつてにっこりと笑った。

「えっ、浩ちゃん、それどういうこと？」

早志は不思議そうな顔で尋ねた。

1. シーオーツーマックス社

ちょうど10年前のこと。悪魔のような会社が誕生した。

その名はシーオーツーマックス社。

名前の通り、二酸化炭素（CO₂）を最大（MAX）にするために生まれた会社だ。

10年前に地球の寒冷化が叫ばれ、地球温暖化の元凶と思われていた二酸化炭素はその年からいきなり救世主扱いされるようになっていた。

この会社はそれに目を付けた。

つまり石油を燃やすことで排出される二酸化炭素を増加するための装置を開発したのである。各燃焼施設や車の排気パイプなどに取り付けるだけでCO₂の量が2倍になった。この会社はこれで一気に成長し、この10年足らずで世界的な大企業となった。

代表の有栖川社長は年齢不詳、ハーフのような彫りの深い顔をしたハンサムで、ユーモア交えたスマートな語り口でテレビにも登場するなど、マスコミでもひっぱりだこの人気者となっていた。また有力な政治家とも親しく、政府の寒冷化対策のプロジェクトを次々に受注していた。

しかし一方で彼に関する悪い噂も聞こえていた。そのひとつが影の総理大臣とも言われ、金に汚いと評判の鳩丸環境大臣への賄賂工作の噂である。鳩丸大臣の選挙で必要な多額の資金を有栖川がこっそりと渡しているのではないかとの疑惑だ。しかし本当の所はわからないままで噂は浮かんでは消えていた。つまり彼はいつも謎に包まれていたのである。しかも側近の人間でさえ有栖川の過去を知るものは誰もいなかったのである。

彼は、ある時、突然資産家として登場し、環境問題を扱う会社を買収すると、社名を現在のものに変更し、一気に有名企業に仕立て上げた。家族はいないようだし、出身地などもまったく不明だった。執拗に有栖川の秘密を追っていた写真週刊誌「フラッシュ・フォト」は編集長が車を運転している最中に謎の事故死を遂げ、突然休刊となってしまった。それ以来皆それ以上追及するのを怖がって有栖川の秘密を探るマスコミはいなくなったということだ。

2. 鳩丸大臣と有栖川

午後2時。

黒塗りの大型の乗用車が、東京都心にあるエンパイア東京ホテルの地下駐車場に停まった。

秘書と思われる男が前の座席から迅速に降りると後部座席のドアを開けた。

「大臣、取材陣などはありません。ご安心ください」

その声に顔をほんの少しだけ肯くと、スーツ姿の一人の大柄な男が車の外に出てきた。鳩丸大臣だった。

「彼はもう来ているのかね？」

「はい、最上階の23階の部屋ですすでにお待ちです」

そういうと秘書の男はすぐに部屋に直接行けるエレベータに大臣を案内した。

「お待ちしております」

23階にある部屋の扉を秘書が開けると、部屋の中では入り口付近に有栖川が立ち、入ってくる大臣に向って深々と頭を下げている。

「いつから来ていたんだね？」

大臣は、頭を下げたままの有栖川の脇を通り過ぎ、そのまま窓際のソファに腰を掛けながら有栖川にも座るように席を勧めた。同時に秘書には出て行くようにと、目で指図した。秘書が部屋の外に出るのを確認してから有栖川は腰を下ろした。

「1時間以上前からです。先に乾杯のつもりでお酒をいただいております。すみません」

有栖川はそう言って笑った。

「君にしては随分なはしゃぎようだね。何かグッドニュースでも？」

有栖川は真顔に戻り、すぐに話を切り出した。

「毒素を含む石油の件ですが、本日対策装置の開発が無事完成いたしました」

大臣は驚いたような顔を見せて、

「それは随分と早いなあ。私が極秘で仕入れた情報を元に、君に事前に相談したのがわずか1ヶ月前じゃないか。もうできるなんて……さすがは日本が世界に誇る会社だな。で、どういう仕組みなんだね？」

大臣の好奇心いっぱいの質問に対して、有栖川は少し得意気な顔で話始める。

「現在世界中で普及しています当社の製品シーマックス2000はご存じの通り二酸化炭素の排出量を2倍にするものです。そして今回開発したのは、この装置用の毒素抜き取り変換フィルターです。これで毒素はなくなります」

「ゼロになるんか？ 毒素はどうなるんだ？」

大臣は半信半疑の声をあげた。

「毒素は固形となり、そのまま地中に埋めるだけです」

「ほー、それは凄い！ 分離できるなんてすごい技術だ。これはまさにすばらしい発明だよ」

大臣は満足そうに大きく肯いた。

「すばらしい。実にすばらしい。これで今回の危機は回避できそうだな、有栖川君」

大臣はそういうと右手を有栖川に伸ばし握手を求めた。握手に応えながら有栖川は薄笑いを浮かべながら、

「それで今回の開発料として100兆円を頂ければと思います」

大臣の顔がみるみる青くなる。

「１００、１００兆円？？？ 何を言ってるんだ！」

大臣の目に怒りがこもっていた。有栖川は意外な顔を見ると、
「地球を救う技術ですよ。１００兆円でも安いと思いますが。それに日本だけの負担ではなく、世界で負担してもらえれば何でもない金額でしょう？」

と、平然と言ってのけた。

「有栖川君、君はこの地球の危機とも言うべき一大事に大儲けしようとするのかね？」

「ええ。大臣、いいですか、寒冷化を防ぐには石油をこれからも使い続ける必要があります。でもこの石油には毒がある。我々の仕組みで解決するしかないんですよ。そしてこれは我が社にとって最大のチャンスなんです。それをただで提供するなんてとんでもない！」

大臣はあきれた顔をした。有栖川は続けた。

「大臣にはお手間をかけますから、当然ですが１００兆円の５％、つまり５兆円を手数料としてお支払いいたしますよ。どうです、大臣にとっても大きなチャンスでしょう？ 地球のことだけでなく、他にもいろいろお金が必要かと思いますが……」

意味ありげにそういうと有栖川はにこりと笑った。

「……ま……そういうことなら仕方がないか。各国との交渉が大変だけれど、しょうがない……なんとかしよう」

大臣はいかにも面倒そうな顔をして答えたが、その表情を見ればすでに機嫌が直っているのは明らかだった。とてもわかりやすい大臣である。

大臣は今日中に主要国のリーダーに了解をとるという約束を残し、早々に部屋を引き上げた。残った有栖川は一人で酒の入ったグラスを傾けながら口元をゆるめた。

「これでますます世界は我が社の思いのままだ」

3. 火星移住計画

鳩丸大臣は別の顔を持っている。日本火星移住計画促進会議の議長だ。この会議は日本人の火星への移住を実現するためのものだ。日本人といってもお金持ちだけだ。貧乏人は関係ない。彼らは自分たちだけがしあわせになる方法を検討しているのだ。

具体的なプランはこうだ。

まず、火星に専用の土地を確保する。広さはカリフォルニア州と同じ程度だ。そこに宇宙基地を建設する。次にエネルギー施設を建設する。もちろん、今の火星の主力エネルギーは太陽光発電だ。しかしここではエネルギーは火星の地下に眠っている石油資源を利用する。元々火星には石油がないと言われていた。しかし火星の裏側の一部エリアに油田が存在していることを、昨年火星の裏側の調査を実施した日本の観測隊が発見していたのだ。この件は鳩丸の命令で世界に対しても極秘とされた。そして鳩丸はそのエリアを日本の領土とすることを計画しているのだ。

火星は大気圏が非常に薄いために地球のような温室効果と呼ばれるものがまったく働いていない。そのために火星の温度は非常に低い。だからこそ地球以上に二酸化炭素が必要になってくる。そういう意味では石油を利用した発電は、二酸化炭素を排出しない太陽光発電よりも有益なのだ。

そしてまたまたここでも有栖川の会社の登場となるのである。

鳩丸が有栖川を優遇するのもこの火星のことがあるからだ。石油のプロである有栖川なしにはこの計画はうまくいくはずがなかった。

鳩丸にとって火星は地球以上に魅力のある場所だった。

「私は政治家として火星の支配者を目指す。火星の大統領だ。地球ではそのチャンスは少ない。せいぜい日本の総理大臣で終わりだ。でも火星ならまだまだチャンスがある。早い者勝ちなのだ」

4. 悪魔の調印式

鳩丸大臣はニューヨークにいた。有栖川の開発した毒素抜き取り装置の件で根回しをするためである。鳩丸はこの装置の存在を利用してもう一つの取引をしようと考えていたのだ。つまり例の火星移住計画の件である。火星の広大な土地を取得するのは容易なことではない。各国、特に重要な問題に関しての決定権を持っている国連の理事国が承認しない限り何も実現できないのである。鳩丸は今回の装置を提供する代わりに火星の土地の件を了解させるつもりだった。実はこれも有栖川のアドバイスだった。鳩丸は既に有栖川の操り人形と言っても良かった。

理事国にとっても、有栖川の装置は喉から手が出るほど欲しいものだった。さらに鳩丸は理事国の富裕層もこの土地に住む権利を与えることを約束した。理事国は何の抵抗もなく理解してくれた。最終決定は、一カ月後に開催される国連総会で決議されることになったが、理事国が承認した以上は事実上の承認と言えた。日本の所有という形ではなかったが百年間の専有利用権を日本に与えるという条件だ。あの油田がある場所だ。そして初代統括者には当然のように鳩丸が選ばれることになる。すべては彼の、いや、有栖川の思い通りに動き出していた。

1. 宇宙線に代わるもの

「僕ら子供だってできることがあるよ」

浩一郎のその言葉は早志の胸に響いた。子供にできることがあるの？ この地球の危機の真っ只中に？？？ 早志はその先を早く聞きたくなった。

「どういうことだよ、浩ちゃん」

浩一郎はにっこり笑いながら話始めた。

「うちのお父さんが何を研究しているのかは知ってるよね？」

浩一郎は早志の目を見ながら確認した。

「確か、う、宇宙線とかいうものの研究だよな？ よくわからないけどうちのお父さんが浩一郎君のお父さんはすごいって言ってたよ」

浩一郎は少し得意気な顔をしながら話を続ける。

「宇宙線というのはエネルギーを持った粒子だ。新しい星が誕生する時とかに生まれるんではと考えられているんだ。この宇宙のはじまり、つまりビッグバンの時にもできていたし、いまだにその宇宙線はこの宇宙を飛び回っているともいわれているんだ」

「たしかビッグバンは50億年くらい前だったよね？ なら50億年も飛び回ってるってこと？」

早志が驚いたように話す。

「そうだよ。それだけとてつもないエネルギーを持った粒子だってことだよ。そしてうちのお父さんはこの宇宙線を使って無敵のエネルギー装置を開発しているんだよ」

「できたの？ そんな夢みたいな話！」

猛がおちよくるようにすかさず質問する。浩一郎は少しむっとして答える。

「そんな簡単な研究じゃないよ。だからこそお父さんが取り組んでいるんだ。お父さんは天才なんだから！」

猛はさらにきつい質問をする。

「君のお父さんは、天才というより、ちょっと変わった人だって聞いているよ？」

浩一郎の顔が真っ赤になる。これは爆発すると思った早志があわてて口を挟む。

「猛、そんなつまらない噂話なんてどうでもいいだろう。続きを頼むよ、浩ちゃん」

浩一郎は猛を睨みつけながら渋々話しを戻す。

「宇宙線を取得するにはまだ時間が掛かるんだ。特にお父さんが取得しようとしているのはスーパー宇宙線と呼ばれる、とても高いエネルギー量を持つものなんだ。だから簡単には取得できない。でもお父さんが開発した宇宙線吸収装置は宇宙線以外のエネルギーを持つ粒子も吸収することができるんだ。つまり宇宙線よりも簡単に取得できる粒子を先にエネルギー源にできないかって考えているんだ。そしてお父さんがいうには身近に宇宙線の代わりの粒子を見つけたっていうんだよ」

清が好奇心一杯の顔で質問する。

「なんだい、それは？ 身近なものって？」

浩一郎は少しいたずらっぽい表情で皆の顔をゆっくりと見回しながら話した。

「それはね、僕たちだ！」

「はあーーーー」

猛がすっとなきような声をあげた。今度ばかりは早志も猛の気持ちと同じだった。

「なんの話をしてるんだい。からかってるのかい？」

早志も少し怒った声で質問した。浩一郎も皆の予想以上の反応に少しあわてて答えた。

「ごめん、ごめん。からかうつもりはないんだけどね」

2. 僕らのエネルギー

浩一郎の話は続いた。

「気功って知ってるかい？」

「知ってるよ、テレビで見た。気功の先生が出てきて、えいっとやると前に立っていた人がふつとばされるんだよね？」

うちのお父さんは奥田道場の空手師範だからね。そのお父さんでさえも驚いていたよ、凄いて！」

最近空手で黒帯になった猛が興味深々に答えた。空手着を着てるわけでもないのにズボンの前側に両手を置いてその気になって猛が構えているのが、早志には少しおかしかった。

「その通りだよ。人の体から出るもので、それを例えば、病気の人の悪い部分に送り込むと治ってしまうこともあるんだ。なぜそんなことができるのかはよくわかってはいないんだけどね。でも何かしらの目に見えない力を出しているみたいなんだ。あつたかくなる遠赤外線というのが出ていることも確認されているみたいだけど、それだけではないんだ」

「なに？」

皆で一斉に声をあげた。

「うん。たぶん何かエネルギーを持った粒子が気功の先生の手から出ているんじゃないかと思われるんだ」

「なんかさっきの話だと宇宙線みたいだね？」

清が何か発見したような顔でつぶやいた。

「そうなんだよ。お父さんもたぶん宇宙線と同じようなエネルギーを持った粒子じゃないかって思っているんだよ」

「つまりお父さんの宇宙線吸収装置でそれが取得できるってこと？」

早志が浩一郎に尋ねた。

「さすが早君、理解が早いね！ その通りなんだ。取得できるんだよ。父さんが2週間前に実験したんだけどね。僕も手伝っていたから目の前で気功のエネルギーを取得できた時には本当にびっくりしたよ。気功から得たエネルギーで電気をつけることができたんだからさ！」

「本当か！！ 凄い！！ じゃ石油なんかいらんないじゃないか？」

猛が興奮して叫んだ。早志も続ける。

「そうだよ。これは大発明だよ！ さすが天才なんだよ、君のお父さんは！」

浩一郎はうれしそうな顔をしながらも、

「ありがとう！ そう、確かにこれはすごいことなんだ。けどね、気功というのはやはり特別の先生しか大量のエネルギーを出せないんだよ。だから石油に代わるエネルギーとするには不十分なんだ」

と少し残念そうに話した。

「そうかあ……」

三人ともがっかりした感じで同じように天を見上げた。

「だから、僕たちの登場なんだよ」

背筋をのばして、浩一郎がまじめな顔で三人を見回しながらそう言った。

「やっぱり頭悪いのかなあ。意味がまったくわからないよ、俺」

猛が何がなんだかわからない顔で早志の方を見た。

「いや、僕もわからない。浩ちゃん、教えてよ、もっと詳しく」

早志が浩一郎に催促した。

「簡単に言うと、子供からは気功の先生に負けないエネルギーが出ているということなんだ」

浩一郎があっさりとした。

「えー」

三人は同時に声をあげた。

「大人が子供と一緒に過ごすとか何か元気が出るって言われたことはないかい？」

浩一郎が驚いた表情のままの三人に質問した。

「じいちゃん家に正月に行くと、お前に会うと元気が出るってよく言われるけどなあ。あ、じいちゃんも空手家だから元々超元気なんだけどね。でも孫は可愛いもんなんだろう。だから元気が出るんじゃないのかなあ？」

猛がそう答えた。

「そういえば学校の先生って若いよなあ。うちの担任の青野先生ってお父さんと同じ年齢だけど凄く若いんだけど見た目も考え方も…。子供といつも一緒だからかなあ」

清が思い出したように話した。

「それは考えたこともなかったけど、ひょっとしたら関係してるのかもね」

浩一郎が少し笑いながら答えた。

「それでそれも実験したのかい？」

早志が待ちきれずに尋ねた。

「いや、まだなんだよ。子供をたくさん集めないと十分なエネルギーは得られないからね。子ども同士が集まることで生まれるエネルギーらしいんだ。こども一人ではそんなに大きなエネルギーは出ないみたい。でもお父さんは絶対に自信があるっていうんだ。僕は当然お父さんを信じるよ。だから早速その実験をこの学校でやってみたいんだよ！」

いつも冷静な浩一郎が手に拳を作って机を叩いた。お父さんの発明を証明したくてたまらない表情の浩一郎の顔を見ると、同じく父の武志が大好きな早志にはその気持ちがわかる気もした。

「やろうぜ！ 面白そうじゃないか！」

猛がすぐに乗ってきた。清も深く肯いた。ただ早志は少し困惑した表情で

「でも休校中だからな。今はできないんじゃないかな……」

「校長先生に相談しよう！ お父さんがぜひ校長先生に話がしたいって言ってるんだよ」

2. 僕らのエネルギー 続き

浩一郎が早志の肩に手を置いた。

「でも校長先生が許可するかなあ。あまりにも信じられない話だからね」

早志がそういうとすぐに浩一郎が反論する。

「早くんは信じてないの？」

「いやそういうことじゃなくて、普通の大人は信じないと思うんだよね」

「信じてもらうんだよ。一生懸命に話せば校長先生なら信じてくれるよ」

「校長先生は普通の大人じゃないもんね、偉いんだから」

猛が浩一郎に助け舟を出す。すっかりやる気になっているようだ。

清も同じだった。早志もこうなったらやるしかないという気になっていた。

「ええい、出たところ勝負だ！ よし、やるぞ！」

早志しが同意すると、浩一郎が手を前に差し出した。それに皆の手が重なる。

その時だった。教室の扉が開いた。

「おいこらっ！ ここで何をしてる！」

体育教師の赤星だった。たまに愛の鞭で生徒の鼻の頭を弾く、ミニ暴力教師だ。

「やべえ」

猛が小声でつぶやいた。

「近所の人から学校に入って騒いでいるやつがいるって通報があったんだ。おかしいと思ってきてみたら、お前らか。こら奥田！ お前が首謀者だな！」

赤星は奥田の顔を睨んだ。

「先生、僕らは何も騒いでないですよ。ここで皆とひさしぶりに会って話しをしていただけです」

優等生の浩一郎がまじめな顔で話す。すると赤星も怒った顔を少し緩めて、

「木村かあ……。お前までいったいどうしたんだ。なぜお前が奥田なんかと一緒になんだ？」

「先生、奥田なんかって酷過ぎませんか？」

猛が不満そうに声をあげる。

「奥田、お前は黙ってろ！ 俺は木村に聞いてるんだ」

「はい、先生。僕らは地球を救うための相談をしていたんです！」

浩一郎はまっすぐな目で赤星の顔を見つめた。

「地、地球を救、救う！？！？」

赤星は目を丸くして木村、そして残りの三人を見回した。浩一郎は迷うことなく止まることなく今までの話を赤星に話し出した。赤星は話が半分しか理解できない感じだったが浩一郎の圧倒的な情熱に押されてそのまま聞き続けた。元々非常に単純な赤星は、だんだんその話を信じるようになってきた。どこまで理解できているのか不安だったけど……。そして最後には校長先生に連絡してみると言ってくれた。

3. 校長先生に直訴

赤星先生の必死のお願いが効を奏して、その日の夕方に はやしまんぞう 林 万 蔵 校長が本郷山小学校に来てくれた。

「赤星君、君の話はよくわからなかったが、なんか熱意は感じた。で、もう一度話をしてくれるかな？」

校長が直立不動の赤星にそう言った。

「はい、校長先生。私の方からご説明するよりも木村君から直接話しをしてもらいたいと思います。というよりも、ちょっと難しい話なんですよ、私には。木村、じゃ後は頼むよ」

困った顔の赤星はそういいながら頭を掻いた。浩一郎は肯くと同じ話を校長に伝えた。

表情を変えずに聞き入っていた校長は、浩一郎の話を最後まで聞くと

「話はよくわかりました。確かに信じられない話ですね。でも、あなたのお父さんは世界的にも著名な発明家ですからね。また木村さんの所はこの学校に土地も提供くださり、大変お世話になっているわけですから、お父さんがぜひお話されたいということであれば、もっと詳しくお話を聞かせていただきたいと思いますよ」

浩一郎はほっとした顔を見ると

「では校長先生、今から父を呼んで来ますので会っていただけますか？」

校長はにっこり笑って肯いた。

4. 浩一郎の父の説明

すぐに浩一郎の父は学校を訪問した。

とにかく学校の裏が浩一郎の家なので話が早い。

「これは校長先生、お急がしい所、お時間をいただきありがとうございました」

「いえ、木村博士。大変ユニークな仮説をお持ちだとか、浩一郎君から聞きました。浩一郎君はさすが博士のお子さんだけあって、立派な科学者ですね」

校長は笑いながら木村博士と握手を交わした。

「浩一郎、よく話をしてくれた。お父さんから礼を言うぞ」

そういうと浩一郎の頭を撫でた。尊敬する父親に褒められて浩一郎はとてもうれしそうだ。

「博士の話を詳しくお聞かせいただけますか？」

校長は博士に席を勧めた。博士は席に腰をおろして話を始めた。

「気功をご存じですか？」

博士は校長先生に尋ねました。

「さきほど浩一郎君の話しにもその話がありましたね。保健の安田先生が確か気功を習われていましたが私自身はよく知りません。病を治したり、人を飛ばすことができるという話しは私も聞いたことがあります」

「そうです。その通りです。現在でもその仕組みははっきりとは判明していないのですが、遠赤外線を発していることはわかっています。またそれ以外にも電磁波のようなものを送り出しているのではとされています」

「電磁波ですか？ 電磁波にそんな力があるんですか？」

「そう思います。何かの力が働かない限り、人を飛ばすことは不可能ですからね」

校長先生はまだ半信半疑でした。

「私は現在宇宙線を利用したエネルギーの研究をしているのですが、宇宙にはダークエネルギーというものが存在するといわれています。実はこのダークエネルギーは宇宙の持つ全エネルギーの70%を占めると考えられています。そしてこのダークエネルギーは人間の体の中にも存在する可能性もあるようなのです。もしかすると気功はこのダークエネルギーを活用しているのかもしれない」

「ダークエネルギーって何か悪の臭いがしますが……」

「いえいえ、それはSF映画の見過ぎですよ。この場合のダークというのは見えないというような意味だと思ってください。今の宇宙の動きを説明するためにはこの見えないとしか思えないダークエネルギーが存在していないとおかしいということなんです。まだその存在そのものも証明されてはいなんです」

だんだん難しくなる話に、校長先生は腕組みをしてただ唸るだけだった。

「つまり気功もそして子供の出すエネルギーも、このダークエネルギーのようなものだと？」

「その通りです。子供と一緒にいるだけで何か元気をもらったような気になるでしょう？ それですよ」

「うーん。仮にそうだとしてもそのエネルギーを本当に収集できるんでしょうか？」

「それはやってみないとわかりません。恐らく気功で成功したように私の開発した宇宙線収集器を少し改良すればうまくとらえることができると思っています。ですから今回校長先生にお願いしたいのがこの学校の生徒さんたちを全員集めて実験をやりたいということなんです。どうかお願いできませんでしょうか？」

博士はそう言いながら頭をさげました。しかし校長はとても困った顔をして、
「大変興味深いお話です。今世界がエネルギー危機を迎えている中でぜひやるべきことなのかも知れませんが、しかしながら、今は生徒は自宅で待機するようにとの政府からの指示があります。なので私の独断では皆を学校に収集することはできないんですよ。教育委員会の許可が必要なんです。教育委員会をご存知のようにとても保守的なところですからね。今伺ったお話をとても信じてくれるとは思えません。何か政府の後ろ盾があれば話が早いのですが。博士から政府に働きかけて頂いたらどうでしょうか？ 博士の頼みでしたら大丈夫だと思うのですが」

「今の政府はシーオーツーマックス社とべったりですからね。余計な新エネルギーの登場を望んではいませんよ。そんな話を政府に話したら必ず潰されてしまいます。先に実験をしてその成功結果を世界で発表するしか方法はないと思っています。ぜひご協力ください」

再度博士は頭を下げた。困りきった顔の校長は、しばらく沈黙を続けた。そして手持ち無沙汰から無意識にTVのリモコンをいじっていて、そのまま誤ってスイッチを入れてしまった。

TVの中の映像に皆の視線が集まった。

「え……」

5. 信じられないニュース

TVでは大げさな表現で有名なニュースキャスターが大きな声で絶叫していた。

史上最大の発明を称えていた。

早志が思わず声を上げた。

「これってエネルギー問題が解決ってことなの？」

TVでは政府がまずこの2週間の石油利用停止の本当の理由を説明した。そしてその問題を解決する技術が日本で開発されたこと。その会社が有栖川の会社であることを発表していた。テレビには特別ゲストとして有栖川社長自らが登場し、得意満面の顔で新発明をアナウンスしていた。

「新しい石油に含まれる毒素を除去できるんだって！ これは本当なの、お父さん？」

浩一郎がお父さんの顔をじっと見た。

「政府が公認したということは間違いはないんだろうけど……しかしそんなことができるとは思わなかったよ」

博士はなんだか少しがっかりしたような表情で答えた。

一方、校長先生は急に元気な表情に変わった。

「ということは今回の博士のご提案はとりあえず必要はなくなりましたね。政府の話ですと明日から規制が解除になるとのことです。来週から学校は再開になると思いますね」

一件落着。

早志たちはそれぞれの家に帰った。

しかし浩一郎のお父さんは依然として疑問の顔をしていた。

「本当にこの装置で解決できるのか？」

1. 悪魔の会社が救世主

「またシーオーツーマックス社がやってくれたね！」

ニュースが流れると人々はそういつてシーオーツーマックス社の発明を賞賛した。

「政府の話だと新しい石油資源は毒素に汚染されていたそうじゃないか。もし今回の発明がなければそれこそ大変なことになっていたよ。地球をまさに救ったのが有栖川さんの会社なんだ」

「日本の技術力は世界にも誇れる立派なものだな。まさに環境問題に関しては日本よりも進んでいる国はないよ」

「火星のプロジェクトも日本がリードするらしいよ。日本が独占的に利用できる土地も確保したみたいで、国連総会でも承認されたそうだよ。そしてこれもシーオーツーマックス社が中心になって事業を指揮するらしい。鳩丸大臣もその日本エリアの総裁に就任して火星に移住するという話も出ているそうだ。いよいよ火星での生活も本格化するのかな」

実際に鳩丸と有栖川はこっそりと火星の日本エリア内に火力発電システムを建設していた。表向きは実験棟ということでカモフラージュされていたため、このことは日本政府さえ知ることにはなかった。

各地の火力発電所などではシーオーツーマックス社の開発した毒素吸収装置を取り付け始めていた。新規に開発された油田から産出される石油の量は今後五百年分はあると言われている。これで地球の寒冷化は完全に防ぐことができると声高に宣言する学者もいた。

地球では、もはや誰もエネルギーのことを心配することはなくなった。また元通りに二酸化炭素を一杯排出する普段の生活に戻ったのだった。

2. 転校生

それから1年が過ぎた。早志は6年生になっていた。

世界中では相変わらず石油資源から二酸化炭素を大量に排出していた。

近くの区役所の建物の正面に見える垂れ幕には「石油を使おう！ 寒冷化撲滅」のスローガンが書かれている。

そしてシーオーツーマックス社は世界で一番影響力のある会社となっていた。世界の中心になっていた。有栖川の名前はアメリカ合衆国大統領よりも有名になっていた。

一方で関東電力に勤める父親の武志は暇そうに家でごろごろしていた。エネルギー問題が解決すると武志の役目はなくなるのだった。今年から武志は部長になり管理職として現場の仕事は後輩の人たちに任せるようになっていた。火星の太陽光発電システムも同じく武志の後輩にあたる人がプロジェクトリーダーとして現場の指揮をしているので武志の出番はなかった。管理職になると結構暇になるそうだ。早志は管理職っていいなあとも思ったりした。でも……。

「お父さんは忙しい時の方がかっこ良かったかなあ」

早志は、ベランダに出て洗濯物を干している音子にささやいた。居間では武志が昼寝をしている。よだれを垂らして口をあけている。まことにかっこ悪い姿だ。

「ぜいたく言わないの！ お母さんはもうあんな時代は二度と経験したくないわ。お父さんがよだれを垂らしてられるくらいに平和な世の中であることが一番なのよ」

音子はそう言って、笑いながら、洗い立てのワイシャツのしわを伸ばしていた。

早志は、もうとっくに興味を失ってしまったんだけど、去年よくやっていた戦隊ヒーローのスーパーエネルギー注入のポーズを久しぶりにとりながら、合わせた左右の人差し指を武志に向けた。

偶然、武志が寝返りを打った。

「お父さんのヒーロー役は終了よ。今度は早君の番ね。早くヒーローになってお母さんにいっぱい楽をさせてくれないと！」

音子は早志の方を振り向くと、早志の頭をこつんと人差し指でつついた。

「無理無理無理！ 僕は何の取り柄もないもの。浩ちゃんなんか、科学に詳しいでしょう。猛は空手黒帯だし、清はああ見えてもピアノがうまくて楽譜が読めるんだよ。ヒーローになる資格があるのはあの三人だよ」

早志は自分で肯きながらそう話した。音子はそんな欲のない早志がいとおしくなった。

「早君はとても素直だよ。友達のすごい所を素直に認めることができるんだもんね。それができるのはとても大きな心の持ち主だってことよ。ヒーローって皆大きな心の持ち主でしょう。つまり早君にはヒーローになる資格があるってことよ。だいたい12才でそんなに得意なことがあることが珍しいんだし、これから見つけていけばいいんだよ。焦らない、焦らない！」

音子は左手で早志の肩をつかみながら、右手で早志の頭をゆっくりとなでた。

「焦らないでって。さっき早くヒーローになれっていったのはお母さんだよ。

もう、いい加減なんだから！」

早志はちょっとふくれた。

「ごめんごめん。そうだね。まずは掃除が得意な家庭的なヒーローになってもらうかな！ 早君、掃除機かけてくれる！」

猫なで声で音子が頼みごとをしてくる。

「えー——！ 今からみんなで遊ぶのに——！」

早志はこんなヒーローにはなりたくないと思ったが、もう遅かった。すばやい音子はさっさと掃除機を用意すると早志に掃除機の柄を渡した。

「これだよ。やられた……」

早志はしぶしぶ掃除機をかけた。

その音に驚いて武志が目を覚ました。よだれに気づいてあわてて口をぬぐった。その一部始終を見ていた音子と早志は目を合わせて、ニヤリと笑った。

6年生になって早志のクラス6年2組には一人の転校生がやってきた。しかも早志の隣の席だ。
すぎやましんいちろう
。名前は杉山 紳一 朗。お父さんはシーオーツーマックス社の技術者だそうだ。今一番就職したい会社ランキングで堂々一位の会社。しかもその花形エンジニアだということで、杉山君はクラスの注目の的になった。昔は武志の勤める関東電力が一番人気があつて早志はそれが一番の自慢だった。だからちょっぴり杉山君がうらやましかつた。でも杉山君はとてもいいやつで早志にも気軽に話しかけてくれた。

「立花君のお父さんは何をやってる人？」

「関東電力のエンジニアだよ。今は管理職だけど……」

「へえー、じゃ火星の太陽光発電とかもやってるの？」

「そ、その通りだよ。あのシステム設計はお父さんが中心になってやったんだよ！でも杉山君は詳しいねえ」

今では母にヒーローの役割を終えたとまで言われてしまった父のことをほめてもらえて早志はうれしくて仕方がなかった。

「うちのお父さんは元々環境問題のエキスパートだったんだ。石油に代わるエネルギーを研究してた。それでシーオーツーマックス社からどうしても来て欲しいって言われてそれで三年前に入ったんだよ。今でも関東電力の火星にある太陽光発電システムはすごいいってお父さんがいつも言ってるよ」

「そうなんだあ。でも、杉山君のお父さんの会社は世界を救ったんだからね。もっと凄いよ！」

「そんなことはないよ。今回は二酸化炭素の毒素を抜くだけだし……。そうそう、お父さんが一番尊敬している科学者は宇宙線のエネルギーを研究している木村博士なんだよ。お父さんは、ああいう独創的な研究がしたいっていつも言ってるよ」

「へえ！ 浩ちゃんのお父さんを尊敬してるんだあ！？」

早志は思わず声をあげた。

「浩ちゃん？」

「あ、浩ちゃんというのがその木村博士の子供なんだよ。浩一郎って言うんだ。隣の三組だよ」

「へえー、木村博士の子供がいるんだあ！」

杉山君はとてもびっくりしていた。

「そうだ！ 木村博士を君のお父さんに紹介できると思うよ。浩ちゃんに僕から頼んであげるよ」

「本当に？ それはうれしいなあ。お父さんも喜ぶよ、きっと。どうもありがとう」

杉山君はうれしそうに笑うと、頭をぴょこんと下げた。

3. 悪魔の装置の正体

次の日曜日。今日は杉山君のお父さんが木村博士の家を訪問する日だった。早志が浩一郎に頼んで実現したものだった。

早志も父の武志を連れて訪問した。武志は本当に暇らしくすぐについてきた。

「お邪魔しまあーす」

勝手を知ってる早志は、そそくさと博士の部屋に向かった。武志がおいおいと言いながらも、自分も靴を脱いで早志について行く。

博士の応接テーブルには既に杉山君が座っていた。しかしそこには杉山君のお父さんの姿はなかった。

「あれ？ 君のお父さんはまだなの？」

早志は、背を早志に向けて座っている杉山君の両肩にそっと手を置いて尋ねた。杉山君の背中が震えていることに早志は気がついた。杉山君はうつむいて泣いていた。

「杉山君のお父さんは行方不明なんだよ、早君」

横から浩一郎が声をかけた。

「行方不明？ ど、どういうことなんだい？」

早志は杉山君の肩に置いていた手に力を込めた。ちょうど杉山君の肩を揉むような感じになった。杉山君は振り返って早志を見た。杉山君の目は真っ赤だった。

杉山君の代わりに木村博士が説明を始めた。

「杉山君のお父さんは一昨日から家に戻ってないんだよ。お父さんは家を出る前にもし戻ってこなかったら、私に手紙を渡すようにと杉山君に言ったそうさ」

そうすると木村博士は手元にあった手紙を広げ、それを読み始めた。

拝啓 木村博士

私はあなたの宇宙線の研究を常にあこがれをもって影ながら応援させていただいておりました。

そのあなたの息子さんがうちの紳一郎の同級生であるとは本当にびっくりしましたし、大変うれしく思っています。

さて、本日は博士のお宅にお伺いするという大変名誉な機会を頂き天にも昇るような気持ちでしたが、しかしこの手紙を読まれているということはご面会が叶わなかったということだと思います。

ご承知かと思いますが、私はシーオーツーマックス社で技術者として勤務しております。私はそこで昨年発表されました毒素除去装置を開発したチームの主任をしておりました。

この装置、私どもはリムーバーと呼んでいますが、このリムーバーは毒素を含んだ石油から毒

素を分離し、その毒素を固形化するものです。この固形化したものは埋め立て地などに廃棄されるのです。この固形物については、まったく安全であると日本政府は発表していますが、実際には五年程度経過しますとその毒素が染み出してきます。つまり毒素は再び地上に現れるのです。

その点は我々も急いで開発していましたからあくまでも試作機だと思っていました。

しかし有栖川はこれでまずは充分だと言い、我々にも何も言わずに突然世間に発表したのです。実はこのことは日本政府もいまだに把握しておりません。いや実際には鳩丸大臣までは把握されていますが、それ以外には知らされてはいません。有栖川は鳩丸大臣には、すぐに装置を改良することで対処するということを告げていて、鳩丸大臣も既に発表してしまったために、パニック状態の世界を沈めるために一時的には秘密にしてもしょうがないであろうと判断したそうです。私たちもあの石油利用停止のような酷い状態を再び世界に呼び戻すことはできないと納得し、急いで装置改良を進めようと決意したのであります。

しかし本当は有栖川にはそもそも改良する気がなかったのです。彼は地球にはもう関心がなく、火星に移住しそこで権力を持つことを夢見ているようなのです。

私たち技術者は抗議しました。これでは世界に対する裏切り行為だと。日本の信頼を失わせてしまうと。鳩丸大臣もさすがに慌てたようですが、逆に有栖川に今更公開しても大臣の責任は重く、大臣の職を辞めなければならなくなるがそれでも良いのかと脅すようなことを言い出してしまい、大臣もどうしようもない立場のようなのです。

我々は先週完成した改良機の試作版を持ってこれから有栖川の自宅に向かいます。

まだ完璧ではないのですが少なくとも毒素の漏れを十年は遅らせることができるはずです。彼に良心があれば採用してくれるはずです。

最後にもう一度彼を信じたいと思います。

お願いなのですが、もし私が戻らない場合は、つまりこの手紙を読まれた場合ですが、世界中にこの事実を告知して頂けませんか？

私が直接告知してもおそらくだれも信じません。内部の人間ですから。

ですから、博士のご友人のネットワークを使い、あのリムーバーの効果第三者機関で調査して頂きたいのです。そしてその結果を世界に向けて発表してください。

どうぞお願いいたします。

杉山仁一郎

博士が手紙を読み終わると、涙を溜めた杉山君が口を開いた。

「お父さんはもう有栖川の手で……博士、お願いします。お父さんを助けてください。絶対にあんなやつの思い通りにはさせないでください」

杉山君は以前に早志にしたようにぴよこんと頭を下げた。早志も叫んだ。

「博士、お願いします。杉山君のお父さんを助けてください。そしてこの件を調査して本当のことを世界に知らせてください」

博士は杉山君と早志二人の顔をしっかりと見つめて、

「君のお父さんのことは警察に知らせて捜索してもらいます。調査の件も了解しました。但し、私はただの奇想天外なことを考える発明家程度にしか日本では思ってもらえていないようですか

ら私の名前を出すことはかえってうまくいかないでしょう。でも海外にいる私の友人の中には世界的にも著名な科学者がいますから、彼らにお願いして調査してもらいます。そして彼らの名前で世界に発表しましょう」

博士の話に浩一郎はちょっと不満そうな顔をしていた。世界一の発明家なのに日本では低い評価しかされないことに無償に腹を立てていたのだ。

3. 悪魔の装置の正体 続く

その様子に気が付いた博士は浩一郎の頭を撫でながら
「浩一郎、人に認められるとか認められないとか、そんなことはどうでも良いことだよ。お父さんは自分の信じたことをやってるだけだ。杉山君のお父さんも信じたことをやっているんだ。それだけで良いんだよ。いや、それがとても大事なことなんだよ」
浩一郎は悔しそうに、でも小さく肯いた。

早速、木村博士は電子メールで世界中にいる友人の科学者たちに調査を依頼した。

杉山君はこの日から木村博士の家で過ごすことになった。杉山君のお母さんは半年ほど前から病気で入院しているそうだ。だからお父さんが帰ってこない今は杉山君は家でひとりぼっちになってしまう。

それではと博士が杉山君に泊まるように声をかけてくれたのだ。博士の家は早志のマンションの家の3倍の広さがあるから杉山君が部屋を借りてももちろん大丈夫だった。

1ヶ月後、調査が無事終わった。
すべてのテスト結果は明白だった。
杉山君のお父さんの言った通り、固形物から毒素が漏れることが判明したのだ。
シーオーツーマックス社が事前に日本政府に提出していたテスト結果はすべて偽ものだったのである。

ためらうことなく博士はその結果をインターネットで公開することを調査した科学者たちにお願ひした。
そして、それはあっという間に世界中で公開されたのだ。

有栖川はその頃突然姿を消した。
シーオーツーマックス社を後ろ盾にしていた鳩丸大臣は病気を理由に緊急入院して表舞台から消えた。
彼らの野望は挫折したのだった。いや地球ではと言った方がよかった。
そして警察の懸命の捜査にもかかわらず、杉山君のお父さんの行方はわからないままだった。

「お父さんは絶対に大丈夫だよ。お父さんは優秀な技術者だ。有栖川には必要なんだ。絶対に簡単には手放さないよ。僕は有栖川がお父さんを連れていると思うよ」
そう言って早志は、隣の席に座る杉山君を教室で毎日励ました。

4. 日本イジメ、始まる！

またたくまにシーオーツーマックス社の毒素吸収装置の正体が暴かれていった。

新しい石油の利用が禁止された。世界は再び石油危機に見舞われてしまったのだ。今度は二週間の利用停止では済まなくなった。そして今回の偽装置騒ぎで怒った石油産油国は一斉に古い油田から産出される毒素のない石油の輸出を停止したのだ。石油の値段が高騰した。誰も石油が買えなくなった。

特に今回の騒動の張本人である鳩丸と有栖川の住む日本への風当たりが特に強まっていた。

すべての産油国は今後日本とは二度と取引はしないと宣言した。またエネルギー以外でも食糧に関しても日本には輸出しないと言い始める国も現れていた。

日本国内で生産される食糧はたったの五%しかなく、残りは海外から輸入しているのだ。だから食糧の輸出を止められると半年後には食べるものがなくなることになる。

海外旅行をしていた日本人が観光中に地元の人々に囲まれ殴られるという事件がいろんな所で起きていた。

世界中で、まさに日本イジメとも呼ばれる現象が起き始めていた。

5. 日本が壊滅する

小松原総理大臣が国会で演説を始めた。

1日1時間だけ放送されるテレビの時間を利用して全国にその映像が届けられた。

「皆さん、我々日本はただいま存亡の危機にあります。どこの国もこの日本と付き合おうとはしません。もちろん今回の許しがたい犯罪を犯してしまったのは日本の会社であるシーオーツーマックス社です。しかしながらわれわれ日本がここまで嫌われる理由はないはずです。現在のエネルギー危機の中で世界に余裕がなくなった今、そのいじめの対象として日本が選ばれた可能性があります。なんともいえない悔しさではありますが、しかしここでくじけてしまってもしょうがありません。日本のこれまでの世界平和への貢献を訴え、そしてこれからも日本が世界に貢献できることを主張して生き残っていこうではありませんか。この未曾有の危機を救うのも世界を救うのもこの日本であると信じて生きていこうではありませんか！」

早志はTVでこの国会演説を見ていた。早志は政治家はあまり好きではなかったが、この小松原総理のことは好きだった。

総理が一年ほど前に本郷山小学校の科学教室を視察に来た際に、早志はクラス代表で小松原総理を案内したことがあった。猛と清が、嫌がる早志を無理やりクラス代表に推薦したのだ。

総理への挨拶の言葉を早志が代表して読んでいる時に緊張して、少しどもってしまったのだけれど、小松原総理はゆっくり話していいからね、と小声で応援してくれたからだった。とてもやさしい眼をしていたし、この人は信じてもいいと思ったからだった。

「よし、僕ら子供がこの日本を救うんだ！」

早志は堅く心に誓うのだった。

1. 校長先生の決断

学校は再び休校になっていた。父の武志はまた代替エネルギーの開発プロジェクトに再度取り組むことになり、管理職から現場に戻っていた。音子曰く、帰ってきたヒーローだそうだ。

早志は学校に向かった。

生徒は家で待機ということになっていたんだけど、いても立ってもいられなくなったのだ。

「猛！ それに清！」

やはり二人は来ていた。思ってることは同じらしい。

「早志、TV見たよな？」

「ああ見たよ。日本を救うのは僕ら子供だよ！」

三人は同時に肯いた。

「日本は悪くないじゃないか！ 早君のお父さんたちのお陰で火星の太陽光発電システムが稼働しているし、エコカーや省エネ家電とか日本は昔から地球をきれいにしようって、先頭に立ってがんばってきた国なのに。なんでこんなうそつき呼ばわりされないといけないんだよ」

清が口を尖らせて抗議をする。

「そうだよ。シーオーツーマックス社だけのせいじゃないか！」

猛も机を叩いて怒りを表した。

「いや、有栖川と鳩丸のせいだよ。杉山君のお父さんは悪くない。有栖川に利用されたんだ」

早志には日本中で杉山君のお父さんたち技術者も非難されていることがたまらなく嫌だった。杉山君は今も肩身の狭い思いをして暮らしている。だからシーオーツーマックス社のせいにして欲しくない。悪いのはあの二人なんだから。

「やはりあのプロジェクトしかないよ。今すぐ実行に移さないと時間がないよ」

清が身を乗り出して、二人の目を覗き込む。

「そうだな。それで浩一郎は？」

「うん、今連絡したら博士の手伝いをしていて、装置の開発をしているそうだ」

猛の質問に早志が答える。

「開発??？」

「エネルギー受信装置を改良しているらしいよ」

「手伝いたいよなあ」

「うん、手伝おうよ、早志！」

猛が早志の肩に手をかける。

「また集まってるようだね、元気少年諸君！」

林万蔵校長だった。

「こ、校長！」

「小松原総理の話聞いてね。私もいても立ってもいられなくなった。日本は世界から軽蔑されるほど酷い国なんかじゃない！ 私も教師生活30年だよ。元気で良い子たちを育ててきたと信じているよ。私は今の子どもたちも昔の子どもたちも信じている。何でもいい、この日本を救うためにね。今できることを今信じていることをやるべきだよ！」

「校長先生、じゃ？」

「ああ、あのプロジェクトをやってみようと思うよ」

三人は顔を見合わせてから大きくジャンプした。
「やった！！！」

2. エネルギー源を探せ

校長先生と一緒に三人は浩一郎の、いや、木村博士の実験室に向かった。
「早君、待ってたよ。あつ、校長先生どうもありがとうございます」
玄関口で浩一郎が待っていた。四人は早速会議室に案内された。そこには木村博士が座っていた。杉山君も隅の椅子にちょこんと腰をかけていた。まだ元気がない。

白衣姿の博士はまさに研究者だ。博士の家とこの実験室はすべて自家発電によって電気が供給されているのでとても明るい。

「校長先生ご足労ありがとうございます。さあ、そこにお掛けください。今からプロジェクトの説明をさせていただきます」

四人が席に着くと同時に博士は立ち上がってホワイトボードに図を描き始めた。「今回のプロジェクトでは、そのエネルギー源の特定とそのエネルギー源毎に専用のエネルギー受信装置を開発することが必要となります」

校長先生が手を上げる。

「エネルギー源というのは具体的には？」

「例えば、月曜日の朝は朝礼をされますよね？ その朝礼の最初はなんですか？」

校長先生が少し考える仕草をすると、待ちきれないように猛がすかさず答える。

「おはようございます！ って叫ぶこと」

「そう。正解！ それが大事なエネルギー源です」

「へえー、なるほど！」

清が感心したようにつぶやく。校長先生はまだ不思議な顔だ。

「とにかく元気が出てくる瞬間がエネルギーになるということですね？」

早志が校長先生に助け舟を出した。子供の方がこういう話はすぐ理解できるのかも知れないと思った。

「さすが早君だ。理解が早いね。だからエネルギー源をすべてリストアップしたいんだ」

「よーし、そんなことならお茶の子サイサイだよ！」

と古めかしい言葉で猛が叫ぶ。早志が立ち上がる。

「じゃ、僕から。運動会が一番元気が出ますよ。徒競走、綱引き、騎馬戦、最後のリレー、そーらん節、玉入れ。あ、そうだ、選手宣誓に応援合戦だ。両方とも声でかいし」

負けじと猛が続ける。

「朝のドッジボールに、教室で馬とび、長縄跳び、鬼ごっこ。かくれんぼ、うん？かくれんぼは元気あったらだめかなあ……いや、見つけたら超元気になるからな、やっぱりかくれんぼ！」

清も続く。

「修学旅行も凄いぞ！ 枕投げの時は最高エネルギーだよ！」

「なんか遊びばかりだな。勉強はどうしたの？」

校長先生がするどい突っ込みを入れてきた。皆、そうだったという顔をする。勉強は小学生の大事な仕事だった。清が答える。

「じゃ、ハイハイって手を上げる時だ！ 猛は授業中にグウグウと寝てる時だ！」

「こらっ、清。こんな所で告げ口すんなよ！」

猛が猛烈に怒った。

「まあまあ。誰かがアイデアを出す時に他の人はそのアイデアを批判したらだめだよ。だから恥ずかしがらずに思ったことをどんどん口にしていいんだよ」

博士が口を挟む。清が調子に乗る。

「じゃ、これは。100点もらった時のうれしそうな顔！ 猛は50点でもOKか！」

怒って真っ赤な顔の猛。猛の反撃。

「2年の時に清がおしっこ漏らしそうになってトイレまで走った時はすごいエネルギーだった！」

清は横を向いて無視した。彼の方がすこし大人だ。清は思い出したように、

「4時間目の終わりに皆おなかがグーグーなるけど、あれもエネルギーかな？」

「それはエネルギー不足の合図でしょう！」

校長先生はそう言って笑っている。

「給食を食べる時も皆すごく元気に食べてるからきっとエネルギーは出ているよ」

「もちろん体育の授業も元気の源だよ。跳び箱、鉄棒、サッカー、ポートボールにソフトボール」

体育の時間のヒーロー、猛がそう元気よく声を上げた。

「そうだ。授業参観は、みんな異常に張り切ってるよね。なんか教室中にエネルギーが満ち満ちている」

「音楽の授業も皆で合唱する時はすごいよね！ 教室がゆれるくらいだもん！ あれは相当なエネルギーだよ。猛もオンチだけど頑張ってるよな！」

音楽のヒーロー、ピアニスト清がまた猛をからかった。猛がムツとして清に怖い顔を向ける。その顔を見て早志が思いついたように、

「そういえば怒った時もエネルギーが出ているよね？ けんかした時とかも一杯出るよね！」

と話す。でも、かぶりを振りながら博士が言う。

「怒りのエネルギーは残念ながらマイナスのエネルギーなんだね。だからけんかを一杯したらエネルギーがどんどん下がってしまうよ。戦争なんて酷いだろうね。きっとマイナス過ぎて、氷河時代に逆戻りだよ！」

「そうか。戦争を止めないから地球は氷河期に向っているのかも知れないね！」

浩一郎が納得の顔でそう言った。

2. エネルギー源を探せ 続き

「じゃ、空手もマイナス？ けんかみたいだし！」清が質問する。

「スポーツとけんかは違うよ。スポーツのエネルギーはガッツから生まれる。これは怒りからじゃないよ」

猛がいつになく冷静に答える。さすが有段者だ。

それまで黙っていた杉山君が顔をあげて少し小さな声で

「お父さんのことを考えることもエネルギーは出ますか？」

皆が黙ってしまった。

その沈黙を破るように博士が話す。

「もちろんさ。ちょっと難しいかも知れないけれど、仏教では、人間の感情は怒りと愛情の二つからできていると言われているんだよ。人が元気な時には愛情が溢れているし、元気のない時は怒りに満ちている。だから私はこの学校で生まれるエネルギーは恐らく愛情から生まれるんじゃないかと思うんだ。子どもたちが元気な時って、幸せだったり、幸せな気持ちを感じたりする時だと思うんだよ。杉山君がお父さんのことを考える時ってとても幸せな気持ちにならないかい？」

「お父さんの笑った時の顔を思いだしたらなんかあったかくなります」

杉山君は少しおだやかな顔でそういった。

「だろう！ だから、大好きな人を考えることはとても大事なことなんだ。静かな行動だけど、でもエネルギーはいっぱい出ているはずだ！」

博士の話しに杉山君の顔が心なしか元気になっているように見えた。

「宇宙線も愛情から生まれたのかな？ だったらあのビッグバンっていう現象は、愛情爆発！愛情が溢れすぎたのかなあ？」

清のとんでもない喩え話にみんなが爆笑した。

「清君はロマンティックだねえ。さすがピアニスト、アーティストだ！ 確かに宇宙の始まりが愛情だったらどんなに言いだろうね。愛に満ちた宇宙……でも、残念ながら怒りのエネルギーも同時に放出したみたいだね。戦争を引き起こして何万人の命を奪ったり……だからこそ、この学校で生み出すエネルギーは愛情だけでできたものにしたいんだ」

博士の言葉にみんな深く肯いた。

「随分いろいろ出てきたけど他にはまだあるかなあ？」

博士がみんなの顔を見回す。

「まだ出てきそうだけど、ひとまずこのくらいにしておきましょう」

と、校長先生がそういった。

「そうですね。では今のエネルギー源をリストアップしてそれぞれ専用の受信装置を作ります。これは私と浩一郎で作ります」

博士はそういつて先に浩一郎を実験室の工房へうながした。

博士はそのまま校長先生に向かって

「1週間以内に受信装置を作りますから校長先生には生徒全員を学校に集めていただきたいので

すが、お頼みできますか？」

「はい、もちろんです。教育委員会には事後報告ということでやります。日本のためですから、地球のためですから」

校長先生はいままでになくカッコよく言い切った。

—

3. 生徒集合

1週間後の朝。本郷山小学校には久しぶりに全校生徒が集まった。校長先生は生徒の家を一軒一軒訪問をして協力を要請した。中には嫌がる親もいたが、校長先生の必死の説得に渋々納得してくれたそうだ。でも、生徒は皆うれしそうな顔をしていた。早志が校長先生にささやいた。

「友だちとの再会っていうのも大きなエネルギー源ですね。忘れてました」

校長先生も大きく肯いた。朝礼台に上がると、校長は全校生徒に話しを始めた。

「皆さん、久しぶりの登校、いかがですか？ とても元気そうな顔で校長先生はとても安心しました。ご存知のように日本は今大変な状況になっています。世界から孤立してしまったのです。よその国の誰もが日本という国を信じてくれなくなったのです。残念ながら何人かの心無い人々のためにこのような悲しいことになってしまったと校長先生は思っています。もちろん、私たちは世界から嫌われるような国ではありません。特に日本のこどもたちはどこの国のこどもにも負けないだけの勇気と知恵を持っていると信じています。

さて、今日は皆さんの元気なパワーを使って電気を創り出す実験をします。実験といっても皆さんが特に意識する必要はありません。いつものように元気に学校活動をするだけです。学校中に黄色のお皿状のアンテナが設置されています。危険なものではないので無視してください。あ、さわらないようにおねがいしますね。おねがいはそれだけです。それでは皆さん久しぶりの学校生活を目一杯楽しんでください」

その合図とともに生徒たちはそれぞれの好きな場所に散っていった。

4. 学校エネルギー実験開始

早志、浩一郎、猛、清そして杉山君は今回は実験補助班として活躍することになった。右腕に黄色の腕章を巻いている。猛は得意気な顔をしている。

博士の指示の下でエネルギーの測定収集を行う。

「早志、美佐子ちゃんが縄跳びしてるぞ。測定だ！」

清が早志を誘う。美佐子ちゃんは早志とは同じクラスで、早志の好きな女の子だった。早志は少し照れながら遅れて清の後を追う。美佐子ちゃんは双子の妹の恵美子ちゃんたちと一緒に長縄跳びをしていた。いち、に一、さんという掛け声の中で皆がジャンプしている。清がアンテナを彼女たちに向ける。

「おーーーー、凄いよ。一万ハネタだ！」

ハネタというのは博士が決めた元気エネルギーの単位である。目安としては、一ハネタは、殿様バツタの一ジャンプに相当するそうだ。

（やっぱり美佐子ちゃんはかわいいなあ）測定しながら顔を赤らめる早志に清がアンテナを向けた。

「あーーーーー、5万ハネタだあーーーー。初恋エネルギーはもっと凄いぞ！」

「こら、清、まじめにやれよ！」

怒った早志は逃げる清を追いかけた。そんな二人を猛が測定する。

「ははは、逃げる清は、3万ハネタだ！ 追いかける早志は、凄いーーーー！ 8万ハネタだよ。やっぱり怒って走るともの凄いエネルギーだなあ。でも怒ってるからマイナスだよー！ 早志、怒っちゃだめだよ」

「えっ……そうかあ……」

そんなことを言われて、早志は怒るのが馬鹿馬鹿しくなって、追いかけるのをやめた。

浩一郎は図書室に向かった。図書室では国語の池田先生が一年生のみんなに絵本を読んであげていた。きゃ、きゃ、という可愛い声がこだまする中で、早速測定した。

「へえーーーー、こんなちっちゃい子たちなのに、皆で10万ハネタにもなってるよ。本で感動するってやっぱり凄いんだなあ」

浩一郎は大発見をしたかのように満面の笑顔になった。

早志は勇気君を探した。勇気君はおとなしいけどいつもこつこつとがんばる男の子だ。早志が一番尊敬する同級生の一人だ。勇気君を見つけたのは校門の所だった。勇気君は校門の前の落ち葉を箒で掃いていた。

「勇気君、掃除してるの？」

早志はびっくりして声をかけた。

「うん、今日久しぶりに学校に来たらすこし落ち葉が目についたからね」

早志はこんな立派な態度は絶対に測定しなければとアンテナを向けた。

「やっぱり凄かった。12万ハネタだ！ やはり愛情を込めて学校をきれいにしようという思いはもの凄いエネルギーになるんだねえ！」

深く早志は肯いた。

「あ、お母さん！」

杉山君が突然叫んだ！ 校門に向って駆けて行く。

早志も追っかけた。校門の所には、杉山君の母、美子が立っていた。

「お母さん、どうしたの？」

「今日退院したのよ。それであなたを迎えに来たのよ」

杉山君は最初は信じられない顔をしていたが、すぐに満面に笑顔を浮かべて

「ばんざーい！ 今日からお母さんと一緒にいられるんだ。ばんざーい」

と叫んだ。早志も喜んで一緒になって万歳をした。ふと手に持っていた測定器を見ると、計器は20万ハネタを記録していた。

「うわー、すごいや。杉山君の出すエネルギーが今日一番だ！」

実験は午後3時に無事終了した。博士はとても満足そうだ。

「問題なく測定も収集もできました。装置はもっとコンパクトにしたらいいかもしれない。万歩計のようなものを生徒一人一人に持たせて、そこからエネルギーを最寄のアンテナまで飛ばせばわざわざ追いかけることなく効率よく収集できるはずですね。早速用意しましょう！」

「博士、大体この学校全体でどれくらいのエネルギーを一日で作れそうですか？」

早志が興味深々に質問した。

博士は少し首を傾けて、あごに手を添えながら、

「そうだねえ……1億ハネタは間違いないと思うよ」

「すごいーー」

その答えに、皆が歓声を上げた。

殿様バツタが1億匹が同時に跳ねる様子を早志は想像して頭がくらくらした。

「さて、次は早君のお父さんの出番だね」

そういつて博士は早志を見た。

「うちのお父さん？」

「そうなんだ。この収集したエネルギーを今度は家庭の電気として送らないといけないんだ。電線を使ってね。この電線を管理しているのが君のお父さんの会社だからね」

「管理……そうか管理職にはふさわしい仕事かも……いや、今は現場に戻ったんだ……そ、そういうことですか。了解しました。さっそくお父さんに連絡してみます」

早志のお父さんは相変わらず会社に泊り込んで代替エネルギーの準備をしていた。管理職じゃないのだ！

5. エネルギー電送

武志は仕事の合間をぬって博士の家に駆けつけた。

「あ、お父さん、元気そうだね。またカップラーメン？」

久しぶりに見る父の姿に早志はうれしそうな顔をした。武志は人差し指と中指の二本で箸の真似をしてカップラーメンをすすする仕草でおどけた。

木村博士が玄関口に迎える。

「武志君、どうだい調子は？ 寝てないんじゃないの？」

「浩大君もやったね。あの話が実用化できるとはね。凄いよ。うまくいけばエネルギーで日本がリードできるんじゃないかな」

「うん、そうなのといいね。さっそくだけど、電話で話した通り、関東電力のスマートグリッドを利用させてもらいたいんだ」

スマートグリッドとはいろいろなエネルギー源をつないで自由に利用できる電送ネットワークのことだ。具体的には、例えば、火力発電、水力発電そして太陽光発電などさまざまな電力を組み合わせることができる電送網だ。今回の子供のエネルギーもこのネットワークに流せば、今すぐに家庭でも利用できるようになる。

「それはまったく問題ないよ。すでに本社からの許可はもらってるよ。ここの学校の裏にちょうど大きな電送塔があるからここに接続できるよ。接続用の仕様はこの書類に書いてあるから調整してくれよ。それだけでいつでもOKだ」

科学者と技術者のカッコいい会話を早志はうっとりとして聞いていた。日本をそして地球を救う技術がここで生まれているのかと思うとたまらなくうれしかった。

「ありがとう。さっそく試してみよう」

エネルギー電送実験は午後から実施された。その結果、学校で生産された電力が送電線を通り、この辺り一帯の家庭に問題なく届けられたことが確認された。

実験成功である。

1. 校長先生負けないで！

「まずは近所の3校に話しをつけてきました」

晩遅くになって、校長先生が博士の家を訪ねてきた。今日1日校長先生は市内の小学校をまわって実験への参加をお願いしていたのだ。中には校長先生を狂人扱いする学校もあったが校長先生の誠意ある話しに耳を傾けてくれる学校がほとんどだった。しかし問題は教育委員会だ。委員会の承認なしには参加はできないと多くの学校が理解を示しながらも結局は断ってきたのだった。しかし3校だけは事の重要性に共感し参加を表明してくれた。

「合わせて4校のエネルギー網だけでも十分な実験を行えるはずです。この結果をもっていよいよ教育委員会への直談判です」

博士は力強く宣言した。

翌日から4校による共同実験が開始された。面白いことに1校だけの実験と違って、各学校が競い合うかのようにエネルギーを出し合うようになっていった。開始してから3日後には4校で合計10億ハネタを記録したのだった。

（各学校から出る学校エネルギーが、他の学校にも伝わって、更に大きなエネルギーを引き出しているのかも知れない……）

博士はこの実験結果に驚いた。

早志は、面白いことに気が付いた。

「博士、この実験結果って、なんか、キャッチボールに似てますよね？」

「キャッチボール？」

「ええ。良い球を投げてやると、もっと良い球が返ってくるんです。それで温かい球を投げるとやっぱり温かい球が返ってくるんです。で、どんどんうまくなるんです。僕とお父さんのキャッチボールの場合ですけどね」

「確かにその通りだよ。もしかすると、日本中の学校でエネルギーのキャッチボールをやると大変なエネルギー量に達するのかも知れないね。早君、良いヒントありがとう！」

早志は自分のキャッチボール理論が認めてもらえてうれしかった。自分も科学者になろうかなと思ったりもした。

1週間の実験を終えた直後に、木村博士、校長先生そして早志の父・武志の三人は緊急で開催された教育委員会に出席した。というよりも呼びつけられたと言った方がいい。実験の噂が既に教育委員会の耳に届いたのである。

「林校長、今回の生徒を巻き込んだ実験の噂は本当でしょうか？」

委員長の落合がするどい目つきで林校長をにらみつける。

「巻き込んだという表現はともかく、はい、我々はある実験を行っております」

「それは具体的には？」

落合委員長は怪訝な顔で二人を見つめた。

博士はその実験の内容を具体的に話した。落合委員長はSF映画を見るような目でその話を聞いていた。

「つまり子供たちの体を使って、危険な電気を発生させているわけじゃないですか！」

どうしたらそんな理解になるのか不可思議だったがこの落合という人は最初から博士たちを悪人と決めつけているようだった。

「危険ではありません。こどもたちは特に意識していないんですが、こどもたちから宇宙線と似たようなエネルギーが出ていてそれを僕らは特製の受信機で拾っているだけなんです。つまりこどもたちがもともと持っているエネルギーですからまったく危険ではないんです。これはおわかりいただけますよね？」

博士は落合を怒らせないようにやさしく尋ねた。

「危険かそうじゃないかを決めるのはあなたたちではないでしょう？ これは生徒の安全を預かる教育委員会が決めることですよ。林校長先生、あなたも当委員会の役割をご存知のはずです？」

そういつて落合委員長は皮肉っぽく校長先生をにらみつけた。

「え、はい、その……」

校長先生は言葉に詰まった。理屈から言えば、落合が正しいからだ。

「これは明らかに規則違反です。校長先生には責任をとっていただきます」

落合は勝ち誇った顔でそう告げた。博士が落合に噛み付くように言った。

「確かに教育委員会にお話をしなかったことは謝ります。しかし仮に事前にお問い合わせした際に了解を得ることができたでしょうか？ 前例がないということで認めなかったのではないですか？ 校長はそんな保守的な教育委員会に期待できないのをご存知だったからこそ今回のような英断をされたんですよ。こんな勇気のある教育者をあなた方は誇りに思うべきです！」

「なにを無礼な！ 林校長、あなたが教育委員会に対して、そんな悪口を言っていたとは失望しました。辞表も覚悟してくださいね！」

「落合さん、あなたでは話になりません。今の日本の危機を理解されていますか？ 世界は日本を無視し始めているんですよ。日本なんか必要ないって言い出しているんですよ！ これは大変なことなんですよ。こどもたちだってそんな日本のことを思ってくれてそれで皆喜んで実験に参加しているんですよ。その気持ちがあなたにはわからないんですか！」

「日本が信頼されなくなったのは有栖川が世界を裏切ったからです。社会のルールを破ったからでしょう！ あなた方も同じじゃないか。規則を破ることを生徒に教えてどうするんですか！」

落合は自信たっぷりに言い放って、そのまま室を出ていった。

三人はその場で呆然と立ちすくんだ。

「あの人では埒があかない……」

博士は右手の拳を握りしめた。

「こうなったらトップと話をつけよう！」

それまで一言も発言しなかった武志が、突然叫んだ。

「トップって……」

校長はつぶやいた。

「日本のトップっていえば、総理大臣に決ってます！」

武志の考えをすぐに理解した博士が当然のように答えた。

2. 総理大臣と面会

とにかく三人は博士の部屋に戻った。早志たちにもことの詳細を報告した。

「す、凄い！ 今度は総理大臣に会うんだ、お父さんたち」

早志は興奮して話した。

とはいえ、総理大臣にどうやって会えばいいのか。三人とも検討がつかない。

「君の会社の社長に話をしてつないでもらうのはどうだ？」

博士が武志に尋ねる。

「社長かあ……しかし彼も教育委員会の連中と同じくらい頭が固いからなあ。今回の実験も社長はあまり乗り気ではなかったし。ま、いろいろなエネルギー源をつなげるというスマートグリッドの実験という口実で許可をもらっているんだ。うちの会社としてはやはり太陽光発電がメインだからね」

と武志は頭を掻いた。

「博士はどうなんですか？ 博士は世界的にも有名ですから」

校長が素朴な質問をした。その質問に浩一郎の目が輝く。父をじっと見つめる。

「ははは。私は世界的に変な科学者だと思われていますからね。夢を追う、ドンキホーテのような……」

博士は自嘲気味に笑った。浩一郎はムツとしてしまう。

「だったら、僕がメールしてみます」

早志が言った。

「えー！」

一同が大きな声を出して驚いた。

「早志は総理大臣とメル友なのか？ そういえば早志は以前、総理が学校に来た時に話をしたんだっただけ」

武志はうらやましそうな顔をする。

「そんなわけないでしょ！ でもね、この前見た子供向けのTVで総理が困ったことはメールしてくださいって言ってたんだよ。困ってるんだから大丈夫でしょ？」

「ふーん。すごいシンプルな発想だなあ。でもそれは意外に良いアイデアかもしれんぞ。政治家というものは国民にアピールしなければいけないと思っている。特に子供やお年寄りにやさしい姿勢をアピールしたがるからな。だから子供からの困ったメールが来たらほっとけないんじゃないのかな」

「確かにそれは一理あるな。よし、早志、急いでメールを書け。いや他の友達にもお願いして同じ内容のメールを同時に送るんだよ。ちょっと迷惑メールと思われるかも知れないけれどもしょうがない。とにかく総理の目につかないと始まらないからな」

早志の父も生き生きとした目でそう続ける。

早速、早志は浩一郎たちにも頼んでメールを総理に送り続けた。

3日後。早志のパソコンにメールが届いた。総理からではなかったけれど、総理大臣官房室のスタッフからだった。

「やった！」

早志はすぐに返事を返した。会える日時を約束して、当日、博士、校長、武志そして子どもたちを代表して早志の四人が総理官邸に向かった。

3. エネルギー法改正

「君が早志君だね？ とても勇気のある子だね。おじさんは関心しましたよ」

会うなりすぐに総理はにっこりと笑って早志の頭を撫でた。

総理官邸の中にある大会議室に四人は案内された。総理側はスタッフが40人ほど登場した。その人数に四人はまず圧倒された。しかし総理の優しい顔を見て早志は落ち着くことができた。

「総理には以前にお会いしています。本郷山小学校に来られた際に質問しました」

総理は一瞬考えていたが、すぐに思い出したように目を大きく開いた。

「おー思い出したぞ！ そうか、あの時の少年か。君とは縁があるみたいだ」

そういうと総理は何度も肯いた。早志は総理が覚えていてくれたことがとてもうれしかった。

四人は席についた。総理側のスタッフが四人を取り囲むように座る。総理が話を切り出した。

「皆さんが新エネルギーを開発しているという話をもう少し詳しく話してください」

博士が代表してその質問に答えた。

「はい。では具体的なお話を……」

博士の話は一時間ほど続いた。総理は誰もがそうであるように、最初は半信半疑で不思議な顔をして聞いていたが途中からは納得する顔に変わっていった。最後は大きく肯くと立ち上がって、博士のもとに歩み寄り、その手を取り堅い握手をした。

「いやあ、本当にすばらしいお話です。これは間違いなく日本を救うエネルギーです。いや世界も救えます。ありがとう。本当にありがとう。早志君もありがとう。君ら小学生の力が日本を救うんだ！」

総理はそういつて早志にも握手をしてくれた。早志は夢の中にいるような気がした。

4. 全国の学校で実験開始

まもなく閣議決定がなされ、早志たちの計画は政府により正式に承認された。国家プロジェクトとして全国で推進されることになったのだ。プロジェクト名は「学校エネルギー推進プロジェクト」だ。

また同時に全国の教育委員会もこのプロジェクトに協力することを要請された。もちろん早志たちの地区の教育委員会も協力を要請された。あの落合委員長も手のひらを返したように豹変して今度は最初から賛成していたような態度になった。早志は心から軽蔑したけど、許してあげることにした。

（僕の方が大人だからなあ……怒ってもマイナスエネルギーだしね）

早志、浩一郎、猛、清、杉山君たちは、武志、博士、校長先生の三人が中心のキャラバンチームの子供メンバーに選ばれた。そしてキャラバン一行は全国の学校を訪問して実験の手伝いを行った。

早志たちは全国の学校を訪問してそこにその学校ならではのエネルギー源があることに驚いたりもした。

例えば、北海道の旭川の小学校では毎朝校庭で行われる全校生徒参加の雪合戦が最大のエネルギー源だった。なんと1000万ハネタをわずか1時間で記録したからだ。皆本気になって毎日雪合戦のリーグ戦をやっている。それぞれのチームが得意のフォーメーションを考えていて、エキサイティングそのものなのだった。早志たちも参加したが、ものの見事に5分で撃沈してしまった。

「凄いや、みんな。こりゃかなわないよ」

清が泣き言をいった。その日の優勝チームは給食に校長先生の奥さん特製のケーキが食べられる特典がついているのだ。エネルギー源はこのケーキなのかも知れない……。

「食べたいなあ」

そのケーキを優勝したチームの選手たちがおいしそうに食べる姿を見て、猛がうらやましそうな顔をする。

「明日も参加したいな」

「明日は青森の学校に行く予定だから駄目！」

と浩一郎が釘を刺す。猛は残念そうにうなだれた。

沖縄の屋久島の小学校ではこんなこともあった。

この小学校では朝一で屋久杉の森の中を散歩することになっている。いわゆる森林浴だ。そうすると子供たちは更にパワーアップする。森から帰ると皆のエネルギー値が2倍になるんだ。何をしても2倍になる。なぜだか博士にもわからないらしいが、古い屋久杉の持つパワーが子供たちに充電されるのかも知れない。

「屋久杉エネルギーは学校エネルギーと相性がいいのかな。早君が言っていたんだけど、キャッチボール理論のようなものかもね。屋久島の子供たちは屋久杉と毎朝エネルギーのキャッチボールをしているのかも知れない。だからエネルギー量が倍になるのかもね。研究の余地があるな」

博士と武志は興味ある発見に興奮していた。

5. 学校エネルギーネット完成

3ヶ月後。キャラバン隊の全国行脚が終了した。

全国各地の実験は大成功だった。

やはり子供の持つエネルギー、学校エネルギーの凄さが証明されたのだった。早志たちは再度首相官邸に呼ばれた。

「早志君たちのがんばりでキャラバンは大成功に終わった。本当にご苦労様。君たちは日本のヒーローだよ」

総理はそう言ってキャラバンの一行を表彰した。

「総理、ではいよいよ学校エネルギーネットを実用化することによってよろしいですね？」

博士が確かめるように質問した。

「もちろんだよ。石油の備蓄ももう底を尽いてきた。時間はない。すぐにネットワークを完成させようと思っている。関東電力をはじめとした各地の電力会社の協力の下に行う予定です」

こうして学校エネルギーネットワークは正式に全国のスマートグリッドネットワークに組み入れられた。こうして石油なしでも日本は生きていくことが可能となったのだ。

1. 火星でテロ発生

有栖川は火星に亡命していた。貨物ロケットの中に紛れ込んで地球から飛び去ったのだ。有栖川は火星の裏側にあるジャパンエリアに潜んでいた。ここは大臣が総裁として支配する場所だった。大臣は例の事件に関してはすべて有栖川の責任にしてなんとかこの総裁の地位を確保したのだった。しかもその権力を使って大臣は有栖川を匿ってあげたのだ。いや、あげたというよりは、有栖川に大臣の責任も世界に公表すると脅迫されたために仕方なく助けていたのだった。

「火星で俺は復活してみせる」

有栖川は拳を握りしめた。

有栖川は火星では太陽光発電のみがエネルギー源であることに目をつけた。

「この発電システムを破壊すれば、火星はパニックになる。そして新しいエネルギーを提供すればこの星を独占できる」

有栖川は笑みを浮かべた。

有栖川は今のジャパンエリア内に石油が埋蔵されていることを以前に大臣から聞かされていた。だからこそこのエリアを絶対に日本が確保するように大臣に要求したのだ。

火星は既にスマートグリッドネットワークで構築されているので太陽光発電以外のエネルギーでもすぐに接続できるようにはなっている。このジャパンエリアで石油を発掘し、それを使って火力発電を稼働させればすぐに火星の電力網を制覇できるのである。

火力発電所のための設備は既に完成していた。

「あとはテロに見せかけて爆破させるだけだ」

有栖川は不敵な笑いを見せた。

テロの手配はお手の物であった。なぜなら、彼の正体はテロリストだったからだ。

彼こそが、昔起きた原子力発電所連続爆発テロ事件の陰の首謀者だったのだ。

ただ、彼は原子力利用の反対主義者でもなんでもなかった。

では、なぜ彼はそんなことをしたのか？

そのわけは彼の生い立ちにまでさかのぼる必要がある。

彼の父親は中東に渡って石油ビジネスで成功した男だった。

父親は一人息子の有栖川を心から可愛がった。彼の石油に対する熱い思いを伝え、彼の仕事の面白さを息子に熱心に伝えた。

そしてそんな父親を有栖川は尊敬した。

しかし父親は40才の若さで不治の病にかかりそのまま回復することなく亡くなった。有栖川が20才の時だ。父親は死ぬ間際に有栖川に、父の会社を守るように頼んだ。有栖川も必ず守ると約束したのだった。

そして、若くして有栖川はその石油ビジネスを継いで社長となった。父親以上に石油を愛する男は会社のために必死になって働いた。

しかしその頃から環境問題の影響で石油は目の仇にされ始めていた。逆にクリーンエネルギーである原子力発電がもてはやされるようになった。

環境、環境の掛け声の中で、諸悪の根源のような扱いをされる石油。しかし、人類はこの石油のおかげで便利な生活を送ることができたのだ。今着ている服だって、電化製品だってみんな石油で作られているのだ。その恩を忘れて手の平を返して声高にクリーンエネルギーを賞賛する人々。冗談じゃないと彼は思った。原子力の怖さを知っているのかとも思った。クリーンなんてもんじゃない。多くの人が放射能を浴びた原子力発電所の事故を忘れたのかと彼は思った。

彼は決意した。彼は自己の父親の作った石油関連事業を守るためにも原子力発電所を潰そうと心に決めたのだ。

そこで有栖川は中東に拠点を持つ原子力利用の反対組織に近づき支援を開始した。彼はその豊かな財力をもとにテロ組織を裏で操ることができたのだ。

「石油こそ地球がくれた最大の贈り物じゃないか！　さんざん人類は石油のお世話になったくせに、温暖化だとか毒が入ってるだとか言って、手の平を返したように冷たく当たりだす。人間は傲慢だ！　父が愛した石油。それを継いだ俺は世界で一番石油を愛する男だ。石油のためなら俺はなんだってやるさ！　そして石油の力を利用してこの火星を俺が支配してやる。人類を石油にひれ伏させてやる！」

有栖川は不敵に笑うと

「有栖川だ。例の件を進めてくれ」

冷静な声で、テロ組織の表のリーダーである古田に指令を送った。

有栖川の指令は火星の衛星軌道上にあるソーラーパネルに、地球から発射された貨物ロケットを衝突させるものだ。あくまでも事故に見せかけたテロだ。

2. 火星も電力がなくなった

「なんだって！」

総理大臣は火星担当大臣からの電話連絡に驚きの声をあげた。ソーラーパネルが事故で破壊されたとの報告を受けたからだ。

「うーん。火星の備蓄エネルギーは恐らく二週間分もない。これは大変なことになったぞ。新しいソーラーパネルを衛星軌道上に打ち上げるにはまるまる一ヶ月は掛かるだろう。間に合わない！」

火星の事件は瞬く間に世界に知れ渡った。しかし各国は自国のエネルギー危機対策で精一杯である。どこも余分なエネルギーなどない。火星を救うよりもまず地球を救えというのが現実なのだ。

国連事務総長は一人総長室にいた。

「どうしようもない。どこの国も動こうとはしない。無理もない。火星進出をしているのは豊かな先進国の一部だけだ。金持ちの道楽と思われても仕方がない。地球の問題を先送りにしたツケが回ってきているのだ」

事務総長には何も良いアイデアが浮かばなかった。

「事務総長、火星から電話です。なんでも有栖川と名乗っているのですが、あの有栖川ですかね？」

秘書が電話を回すか確認している。事務総長はしばらく考えてから電話を回すように指示した。

「あ、事務総長ですね？ 私は有栖川といいます。その通り、あの詐欺男ですよ、ふふふふっ」
有栖川は不敵に笑いながら話を続けた。

「火星の件、ご存知だと思いますが、この解決策をご提供しようと思ひましてね」

「解決策？ なんだそれは！」

事務総長は大声で叫んだ。

「まあまあ落ち着いて、落ち着いて。実は私は今火星にいて地球でできなかったことをここで実現しているんですよ」

「何をしようとしているんだ」

「ですから火星の温暖化を実現しているんですよ。こちらで石油エネルギーを資源にして火力発電施設を建設しているんですよ」

「火星に石油があるという話は初耳だが？ また騙そうとしているのか！」

「日本エリア内で少し前に発見されていたんですよ。このことは鳩丸大臣もご存知ですよ」

「鳩丸大臣も？ なぜ黙っていたんだ。確かに日本エリアは100年間は日本が独占的に利用できる条約が存在するが、少なくとも情報は公開するべきじゃないのか！」

「ですから今公開しているんですよ！ とにかく条件次第では、今すぐにでも電気を送り出すことが可能です」

「つまり今回の事件で失った電力を君の施設で補えるというのか？」

「さすが理解が早いですね。その通りです。そしてご推察の通り、タダでは提供できません。提供する代わりに火力発電の建設費用および送電料としてまずは100兆円を拠出してくださいよ

。ただそれだけでいいんですよ。今度は詐欺ではありませんよ。火星を救うんですよ。ノーベル平和賞をいただきたいくらいですよ」

有栖川は開き直って要求した。

「君は以前にも１００兆円を請求した。また要求するのか！」

事務総長は激怒した。

「勘違いしないでください。確かに１００兆円をいただきましたが、しかし私は犯罪者として指名手配され、その際に私の財産はすべて没収されていますよ。ま、前は詐欺でしたからあきらめました。しかし今度はちがいますよ。今度はきちんといただきたいといっているんですよ」

「君は世界の危機をもて遊ぶのかね！」

「あ、そうそう、それから指名手配を取り下げてください。無罪ということでお願いします。人類の恩人なんですからね。はっはっはっ」

有栖川は高笑いをした。

「あきれて物も言えない。とにかく私だけで決めることはできない。各国に話をしないと……」

「いいですか？ 火星は地球と比べものにならないほど寒いんですよ。エネルギーがなければ火星に住む３万の人々は死ぬしかないのでからね。もう時間はないです。また明日連絡します。それでは！」

有栖川はそういうと電話を乱暴に切った。取り残された総長は一人天井を見上げるだけだった。

「あんな強欲な日本人の思いのままになっていいのか……」

3. 宇宙線電送

火星の事件をTVで知った木村博士はすぐに総理大臣に連絡を取った。困っていた総理大臣はすぐに時間をとってくれた。

「博士、お電話ありがとうございます。それで？」

「はい、総理。火星の事件に関してですけど、例の学校エネルギーを火星に送電することができるかも知れないと思ったものですから連絡してみました」

「なんですって！ 可能なのですか？ しかし火星まで送電するには相当な施設が必要ではないのですか？」

「ええ、通常であればマイクロ波電送による方法しかないと思いますが、火星までの距離まで送電するには相当大規模な施設が必要になります。とても短期間では建設できるものではありません」

「では、どうやって……」

「はい、マイクロ波電送ではなく宇宙線電送を検討してはどうかと思っています」

「宇宙線電送？」

「ええ。以前にもお話しましたが、私は宇宙線のエネルギー転換の研究に長く携わっていました。そして学校エネルギーが宇宙線に近い性質を持つことを発見しました。宇宙線はご存知のように宇宙を自由自在に飛び交う放射線です。ですからマイクロ波電送と違って、より遠くまで移動させることができます。と思います。」

つまり子供たちのエネルギーを学校エネルギーとして収集したものを再度宇宙線に似せた形に変換してそれを火星まで送り、火星でもう一度学校エネルギーに変換するという仕組みです。火星には太陽光発電の受信用パネルがまだ残っているはずです。そこに宇宙線を電送します。太陽光パネルの表面に私が開発した宇宙線吸収ジェルを塗れば宇宙線も採取できるはずです。それを変換装置で学校エネルギーに戻します。ジェルと変換装置を火星に送り込む必要がありますが、逆にいえばそれだけです。大規模な設備は必要ありません」

「ふうむ……詳しくはわかりませんが、確かに可能性はありそうですね」

「ええ、ぜひやらせてください。日本の信頼をぜひ取り戻したいんです。有栖川のようなやつだけが日本人ではないということを証明してみせますよ」

「ありがとう、博士！ あなたのその思い、誇り、本当にうれしく思います。ぜひ取り組んでみましょう！」

4. 実験成功！ しかし.....

早速博士の提案に沿って、学校エネルギーを宇宙線に変換する装置が開発された。またマイクロ波装置を改良した宇宙線装置もほどなく用意された。宇宙線吸収ジェルを沖縄にある実験用の太陽光受信用パネル一面に塗布した。まずは東京ー沖縄間での電送実験を行うことになったのだ。

「それでは、学校エネルギーを電送します」

博士が皆の顔を見回しながら、スイッチを押した。

宇宙線装置に日本中から学校エネルギーが集まった。エネルギーは変換され、宇宙線のような形となり沖縄に向けて電送された。

数分後、沖縄より連絡が入った。

「博士、無事届きました。電気が灯っています！」

一同が顔を合わせる。

しばらくの静けさの後に、思い出したように一人が拍手をすると全員が皆拍手を続けた。

大成功だった。

「総理、早速事務総長に連絡してください！ 日本が解決できると！」

博士は総理を見つめて叫んだ。

「今度は日本を信じていいんですね！」

日本から宇宙線電送の件で連絡を受けた事務総長は、不信感のこもった声でそうたずねた。

しかし事務総長も他に解決のアイデアを持っていなかった。

「はい、信じてください。日本人はうそつきではありません」

総理大臣は自信を持って言い切った。

日本の誇りを守るんだ。

気持ちはただそれだけだった。

1. またしても日本人はうそつき！

事務総長の計らいで、NASAが協力してくれることになった。NASAは火星のマイクロ波受信装置に塗布するジェルを急遽小型高速宇宙貨物ロケットで現地に運んでくれた。

塗布も無事に終わり、準備は万端となった。

博士がスイッチを入れる。

宇宙線装置からエネルギーが電送された。あと五日で火星の電気は完全になくなってしまう。まさに間一髪のタイミングと言えた。

「なんとか助かったようだ……」

総理大臣は安堵のため息をついた。

しかし……。

「博士、大変です。黒点の活動が異常に活発化しています。磁気あらしのようなものが発生している模様です。これでは宇宙線の99%以上は吹き飛ばされてしまいます。1%程度届いても必要な電力量には達しません。少なくともこれは1週間は続くでしょう」

と火星の担当者からの連絡が入った。

「まさか……なんてことだ……。もう時間がないっていうのに……」

「やっぱり日本人のいうことは当てにならない。結局、あの有栖川という日本人の悪党に金を払うしかないのか」

事務総長は落胆してそうつぶやいた。

「お父さん、どうなったの？」

早志が不安そうに武志にたずねる。

「あ、残念ながら厳しいようだ」

武志ががっくりと肩を落としながら今の状況を伝えた。

「そ、そんな。日本は悪くないのに。精一杯やろうとしてるのに。太陽の動きまで予測できないよ。博士が可哀想だよ」

早志が叫んだ。

「そうだけれど……有栖川という日本人が引き起こした事件だからどうしようもない。何を言われても仕方がない。百人力だと思ったのに一人力のパワーしかないんだからしょうがない……」

と武志が力なく言った。

「百人力……あ、そうか！」

早志はひらめいた。

「お父さん、火星の電力はあと何日分残っているの？」

「あと5日分だよ」

「お父さん、大丈夫だよ。僕に任せてよ！」

「えー、早志に？ どういうことだよ？」

早志はそのアイデアを武志に話した。

武志は驚きながらもその意見に賛成した。

早速、博士に連絡し、そして総理大臣にもこのアイデアを伝えたのだった。

2. 小学生の国連演説だ！

早志は、政府専用機に総理大臣たちと一緒に乗ってNYにある国連本部に向かった。

早志のアイデアを博士から聞いた総理大臣は、最初はあつけにとられていたが、他に方法はないという博士の言葉に納得せざるを得なかった。

そうと決めた後の総理の行動は早かった。

早速、国連事務総長に連絡を取り、すべての了解を得た。

早志のアイデアとは、日本一国なら一人力。でも世界100ヶ国が参加すれば、百人力になる。世界の学校エネルギーを集めて、磁気あらし吹き荒れる火星に送り込もうというものだった。

そして、なんと早志がこのアイデアを実現するために、国連で学校エネルギープロジェクトの演説をするというのである。

最初、早志は演説の話を断った。この学校エネルギーの発明者は木村博士なのだから、博士が演説をした方がいいと思ったからだ。

しかし、博士は、早志に言った。

「日本の話、日本の大人の話信じなくなっている世界を振り向かせるには、まだ何者でもない、まだ何もしていない子供の言葉で一生懸命伝えた方がいい」

だったら、博士の子供である浩一郎がふさわしいと早志は反論した。

すると浩一郎は、

「このアイデアは早君が考えたんだから、自分の言葉で説明すべきだよ。それにこの学校プロジェクトだって、僕が早君に話をするのができたから始まったんだ。僕には早君以外に心を許せる友達はいなかったし、早君とあの日教室で会えたからこうして今があるんだ」

と、ちょっと照れくさそうに言った。

「そうだよ、早志がいたから僕らも浩一郎と友達になれたんだよ。早志が僕らを一つにしてくれたんだよ」

猛がそう言うと清も肯いた。

「立花君は、僕のお父さんのことをずっとかばってくれた。だからそんな優しい立花君の言葉ならきっと世界の人にも伝わると思うよ」

杉山君もゆっくりと、でもしっかりと話してくれた。

何の取り柄もない自分をみんなが信じていてくれることが早志には何よりもうれしかった。

みんなの後押しを受けた早志は、覚悟を決めて、ぜひ自分に発言させてくれと総理に告げたのだった。

講演するために壇上に向かう早志は一瞬だけ立ち止まり、そして振り返って、心配して付き添ってくれている武志を見た。

「大丈夫か？」

心配そうに武志は尋ねた。

「うん。自分でやるって言ったんだもんね。やらなきゃね……。日本がうそつき呼ばわりされる

わけにはいかないんだから……」

それだけ言うと、早志は緊張した顔で口をきっと結んで武志に向かって肯いていた。

「……そうだ。これはお母さんからのメッセージだよ」

武志はそういうと日本から持ってきた小型ビデオを再生した。画面には音子の姿が映っていた。

「早君、ヒーローなんか無理って自分で言ってたけど、今の君は本物のヒーローだよ。お母さんは、誇りに思ってる」

そういうと音子は、早志が昔良くやった戦隊ヒーローのエネルギー注入ポーズをとった。早志はその姿を見て、にっこり笑うと壇上に向かって再び歩き始めた。

国連総会を行う会場には、世界各国の国連代表委員が座っていた。その熱気は壇上近くの入り口に立つ早志にも体中に伝わってくる。

「ご出席の皆さん、本日は日本から小学6年生、12歳の少年、早志君が来ています。特別に時間をいただき彼の提案を聞いてください」

会場は珍しい小学生プレゼンターの登場に拍手喝采だ。日本人である前に、子供だからということでみんなが警戒心をなくしていた。

拍手が鳴り止まない中で、早志はゆっくりと壇上に立った。

拍手が止む。

深呼吸をすると、少しだけ震える手でマイクの高さを自分の口に合わせた。

会場はシーンとなった。

2. 小学生の国連演説だ！ 続き

「あ、あー、あ」

しかし、早志がそう言ってマイクの具合を確かめると、会場が爆笑になった。

早志の慣れないといういしさに皆が微笑ましい思いを持ったからだった。

早志はその笑いの意味にとまどいながらも会場の空気のやわらかさにほっとした。

よしっ、これなら大丈夫だ、話せるぞ！ 早志は右手の拳に力を込めた。

「皆さん、こんにちは。

僕は、本郷山小学校6年2組の立花早志といたします。

まず最初に言わせていただきたいことがあります。

僕は、子供です。

しかし、大人に負けないくらいに、いいえ、子供だからこそ、自分の国、日本が大好きだということなんです。

でも……でも……。

悲しいことに、僕らの先輩である大人の中に世界中を騙してしまった人たちがいます。

ごめんなさい。世界中のみなさん、ごめんなさい。本当にひどいことをしてしまいました」

早志はそういうと壇上で丸まるように土下座をした。アルマジロのように……。

会場はシーンと静まり返った。

それから早志はゆっくりと顔を上げた。みんなの真剣な目が早志に集まっていることを肌で感じた。

その目はとっても温かだった。

勇気をもらった早志は、それから再び立ち上がると、マイクに向かって話しを続けました。

「だから、だからこそもう失敗は許されないことを僕も知っています。

僕みたいな子供が日本を代表するなんて、日本は本当に大丈夫なのか？ そんな風に思う人もいるかもしれません。

でも、子供だからこそ言いたいのです。

僕には政治とか経済とかよくわかりません。お金だってもちろんあればいろいろなことが買えることは知っています。

でも、いっぱいあったからといって使えないと思います。だって月のおこずかいだけで僕には

充分だから……お正月にはお年玉までもらっているし……

僕は、ただお母さんのおいしい料理を毎日食べたり、休みの日にはお父さんとキャッチボールとかできればとても満足だし、学校に行って友達と一緒に勉強して一緒に遊べる、それだけのことなのに毎日がとても楽しいんです。

でも、ある日、石油がなくなって、電気が使えなくなると、お母さんのおいしい料理もなかなか食べられなくなったり、お父さんはもっと忙しくなって家に帰れなくなったり、学校は休みになって、友達と遊べなくなったり、ちっとも楽しくないんです。

今まで当たり前だと思っていた普通の生活を送れることが、こんなに大切なことだったなんて考えてもいませんでした。

だから、僕はこれまでこの普通の生活を支えてくれたお父さんやお母さんや学校、友達に感謝していますし、日本にも感謝しています。そして世界にも感謝しています。もちろん、自然を提供してくれている地球にも感謝しています。みんな、みんな、どうもありがとう！

そうです。僕はただあの当たり前だと思っていた普通の生活がしたいんです。もうそれだけで充分です。あのくらしが取り返せるなら、僕はなんだってやります！

僕は人前でしゃべるなんてことは大の苦手です。

学級参観でも本当は当たりたくないなあと思いながら、無理やり手をあげてるような子供です。

あっ、先生、お母さん、ごめんなさい……。

と、とにかく、こんな国連の大舞台でしゃべれるような人間ではないんです。

でも、僕は、決めました。勇気を出して、決めました。

あの生活を守るために、僕にはやらなければいけないことがあるって。僕ら子供にできることがあるなら先頭に立ってやってみようって！

僕は日本が推進している、学校エネルギープロジェクトに子供の代表の一人として参加しています。浩一郎、猛、清そして杉山君、いや、紳一郎、見てるか？

あっ話それました……。

つまり、みんなの代表として今僕はここに立っています。そして僕がここに立っているのは、この学校エネルギープロジェクトへの皆さんの参加をお願いしたいからなんです」

2. 小学生の国連演説だ！ 続き 2

早志の学校エネルギーに関する説明が続いた。

会場の人々は最初は不思議そうな顔をしていたが、徐々に身を乗り出しながら熱心に聞き入るようになった。

「時間はありません。緊急を要するのです。火星に住む3万人の命を救うために皆さんの、特に子供たちの参加をお願いしたいと思います。学校エネルギーを生み出すことは本当に簡単なことなんです。子供たちが学校のような広場に集まってそして一生懸命学び、遊ぶことなんです。なので、大人の皆さんにお願いしたいことは、大きな広場を用意してください。そして、そこに子供たちを送り出してください。その場所に学校エネルギーの機材を24時間以内に日本からすぐに専用機で空輸します」

早志、そうすると深く頭を下げた。

「おーっ」

突然、会場に大きな驚きの声があがった。

なんと会場の席で傍聴していた、ケネマーアメリカ大統領が突然立ち上がり、早志の立つ壇上に向かったからだ。早志は、2m近い身長のカネマー大統領が早志の目の前に立っているのを見上げた。

「だ、大統領??？」

ケネマーはにっこり微笑むと、早志に手を差し伸べた。早志は、恐る恐る手を伸ばして、握手をした。手は熊みたいで大きくて、そして温かかった。

ケネマーはそれからゆっくりと会場全体を見回すように視線を投げかけた。そして、ゆっくりと話した。

「皆さん、早志君のすばらしい演説、どうでしたか？」

私は間違いなく心が動かされました。人類は、政治や経済の問題を乗り越えて、今、早志君のいう「あの生活」を守るために団結すべき時です。子供の頃の気持ちを思い出して、何が幸せなのか。何をやるべきなのかを考えようではありませんか！

確かに、我々世界は、日本生まれの大悪党に騙されました。信頼を裏切られました。しかし、ラストチャンス！ 早志君に免じて、日本にもう一度チャンスを与えようではありませんか！

私は、アメリカ合衆国を代表して、アメリカ全土の大リーグ野球場、プロフットボールスタジアム、そして遊園地を開放します。もちろん、ディズニーランドもね！アメリカのこどもたちができるだけ多く参加することを支援したいと考えています。各国も迅速な判断をお願いしたいと思います」

ケネマー大統領の演説が終わると、一瞬の沈黙の後、全員が立ち上がって拍手を送った！

ケネマー大統領は、もう一度早志と握手を交わし、早志をその大きな体で抱きしめた。

目を丸くして、早志は抱きしめられた。驚きながらも、早志は、この演説がうまく行ったんだと確信した。

各国の国連代表者は、それぞれ学校プロジェクトへの参加を約束した。アメリカに見習い、各国の野球場、サッカー場そして遊園地などがこどもたちに開放されることになった。

「早志、よくやったね」

早志は舞台裏に戻ると、父親そして首相から握手を求められた。

これで世界の理解は得られた。あとは実行するのみだ。

時間はもうない。

3. 世界中の子供たちが参加

世界は動き出した。

各国の会場には、多くの小学生、それに幼稚園児も並んでいた。

日本からの機材は24時間以内に到着した。

世界は日本の迅速な対応に驚きの声をあげた。

日本は信頼を取り戻すために必死だった。

早志の演説を聞いた大人たちも早志の思いを実現するためにプライドを懸けて死に物狂いで動いた結果だった。

NYではヤンキーススタジアムに地元の子供たちが並んでいる。

野球のユニフォーム姿の少年もたくさんいる。

女の子は、チアガールの格好をしている子が随分いる。

みんな気合が入っているのだ。

「早志の演説に感動した。国は関係ないと思う。僕らは子供同士だもん。仲間だよ。子供が火星を救えるのなら喜んで参加するよ」

そんなことを子供たちは口々に声をあげていた。

「みなさん、今日はこのヤンキーススタジアムがみなさんの教室です。いっぱいいっぱい学んで遊んでください」

NY市長が一日校長先生として挨拶をした。

挨拶が終わるのを待って、こどもたちは一斉にグラウンドに駆け出した。

わざわざ駆けつけてくれた本物の大リーガーたちも子供たちと一緒にキャッチボールをして遊んでくれた。

こどもたちがいる所、たくさんのハネタが発散される。

学校エネルギー収集装置がそのエネルギーをゲットする。

「1000万ハネタを収集できました！」

という校長先生の声に

「やった！」

と子供たちが歓声をあげた（この歓声も100万ハネタ追加！）。

こんなことが世界中で同時に起こっていた。

日本でも残った浩一郎・猛・清・紳一郎が中心になって、学校そして各地のスタジアムや遊園地で学校エネルギーを収集した。

結局その日1日で火星に送るために必要なエネルギーの百倍の量が集まっていた。

「すごい！ みんなありがとう」

早志はその報告を聞くと、空を見上げて感謝の声をあげた。

4. 有栖川の最後

世界中のこどもたちのおかげで集まったエネルギーが火星に向けて電送された。あと数時間で火星のエネルギーがなくなってしまう直前のことだった。

「なんてことだ。こんなエネルギーがあったなんて考えてもいなかった」

有栖川は苦々しげにつぶやいた。

とそこへ、

「有栖川、太陽光パネル衛星破壊の容疑で逮捕する」

有栖川は火星駐在の日本の警察官数名に囲まれていた。

「もはやこれまでか……」

そう言うと、隙をついて有栖川は非常口に駆け出した。有栖川はその扉を開けた。宇宙服も着ないで外に飛び出すことは命を捨てることと同じだった……。

（お父さん、石油を守ってやれなかったよ。ごめんなさい……）

有栖川の住んでいたビルの一室で、囚われの身となっていた杉山君のお父さんが発見された。早志の想像していた通り、彼は有栖川に火星まで連れ去られていたのだ。かなり疲れてはいたが、命に別状はなかった。そして、このことは地球の杉山君親子にすぐに伝えられた。杉山君の体からは多分数百万ハネタのエネルギーが出たことは間違いなかった。

5. 子供が元気な地球

再びニューヨークの国連ビル。

第一会議場の壇上には、早志、浩一郎、猛、清そして紳一郎の5人と、武志、博士、校長そして総理の、合わせて9名が勢揃いしていた。

今回の火星テロ事件の解決に活躍したこの9名に対して、国連から表彰を受けることになったのだ。

「あなたたちは、日本人にそそがれた汚名を日本人のプライドにかけて晴らしました。本当に、本当に、世界は日本のテクノロジー、そして日本の迅速な行動力に驚きました。すべてがプロフェッショナルです。これはすばらしいことです。どうもありがとう。

また、木村博士、あなたの発明された学校エネルギーは人類のエネルギー問題を解決できるすばらしいものです。これまで人類はエネルギー源をめぐって醜い争いを続け、時には戦争にまでエスカレートさせていました。しかし博士の発明された学校エネルギーは、こどもたちの元気な活動そのものをエネルギーにするというすばらしいものです。

そして、国連や各国が今後取り組むべきは、世界中のこどもたちが毎日楽しい学校生活を過ごすための環境を提供してあげることです。

早志君、浩一郎君、猛君、清君そして紳一郎君、君たちの勇気ある行動からすべてが始まったのです。素晴らしいチームワークでした。これからもこの友情を大切に仲良く楽しい学校生活を送ってください」

事務総長の表彰の言葉に、会場の参加者が立ち上がって惜しめない拍手を送った。

6. 学校が大好き！

学校エネルギーは、世界で採用されることになった。

博士は発明した権利を無償で使えるようにしてくれたので、皆が自由に利用することができた。

武志は関東電力で学校エネルギー担当となり、まだまだ現場で張り切っている。

杉山君のお父さんは、木村博士の手伝いをするようになった。一緒に宇宙線エネルギーを研究するということだ。

浩一郎君と紳一郎君の二人も学校が終わったらお父さんたちの手伝いをしている。大好きなお父さんと一緒に仕事ができうれしそうだ。二人とも科学者を目指している。

こどもたちは学校に行くこと、そして元気に学んで遊ぶことがその地域のエネルギーになることを知った。

こどもたちは嬉々として学校に通いだした。

「僕らがこの町を支えているんだ！」

そういうプライドを持って、こどもたちは生きるようになった。

公園など子供たちが集まる場所にも学校エネルギーの装置が設置された。

驚いたことに、公園にはお年寄りも多いんだけど、子供たちがそばにいてだけでこのお年寄りたちの体からもほんの少しだけエネルギーが放出されることがわかった。

子供がそばにいてだけで、学校エネルギーは大人からも発散されることが証明されたのだ。これは博士も予想外の結果だった。

総理は、思った。

日本は、世界は、学校を中心にして
平和な世界を実現できる。

子供たちだ。

そして人だ。

人こそが地球の最大の資源なんだ。

人が元気であれば地球は必ず元気になる！

子供たちに負けないように大人も頑張らないと！

そして政治家自身もしっかりして世界のために働こう！

それから3ヶ月。大騒ぎだった世の中もようやく落ち着いた。

日本中、いや世界中のヒーローとなった早志たちもまた普通の子供に戻っていた。

早志はもうお寝坊さんではなくなった。おかあさんもびっくりだ。

「だって学校が楽しくて楽しくてたまらないんだもん！」

僕らは毎日学校エネルギーを生み出すんだ。

みんながヒーローなんだよ！

僕は学校が大好き、地球が大好きだ！

朝寝坊なんかもったいなくて！

おかあさん、行ってきます」

学校に続く坂道を早志は全力で駆け上る。

坂道を上り切ると、道は平たくなり、正面には、学校の正門が見える。

早志が校門に駆けていく。

右側の道から、猛と清と一緒にやってきた。相変わらず仲が良いのか悪いのか、お互いをからかいながら並んで正門を通過する。

左側の道からは、浩一郎と紳一郎と一緒に登校だ。きっと二人は昨日実験で博士の家に泊まったんだろう。ちょっと眠そうだ。

校門ではうれしそうな顔で校長先生たちがみんなを迎えてくれる。

先生、おはよう！

みんな、おはよう！

さあ、今日は何をしようか！

こどもたちの楽しい一日がまた始まる。

おわり